

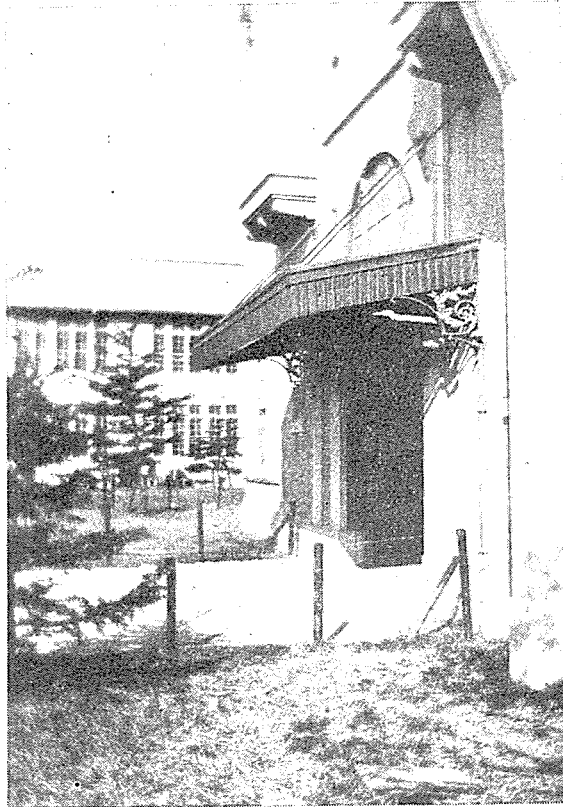
The Kansai University Bulletin

關西大學學報

行發日五十月三

號七十八第

年六和昭



(見所舍學山里千) し ざ 陽 春

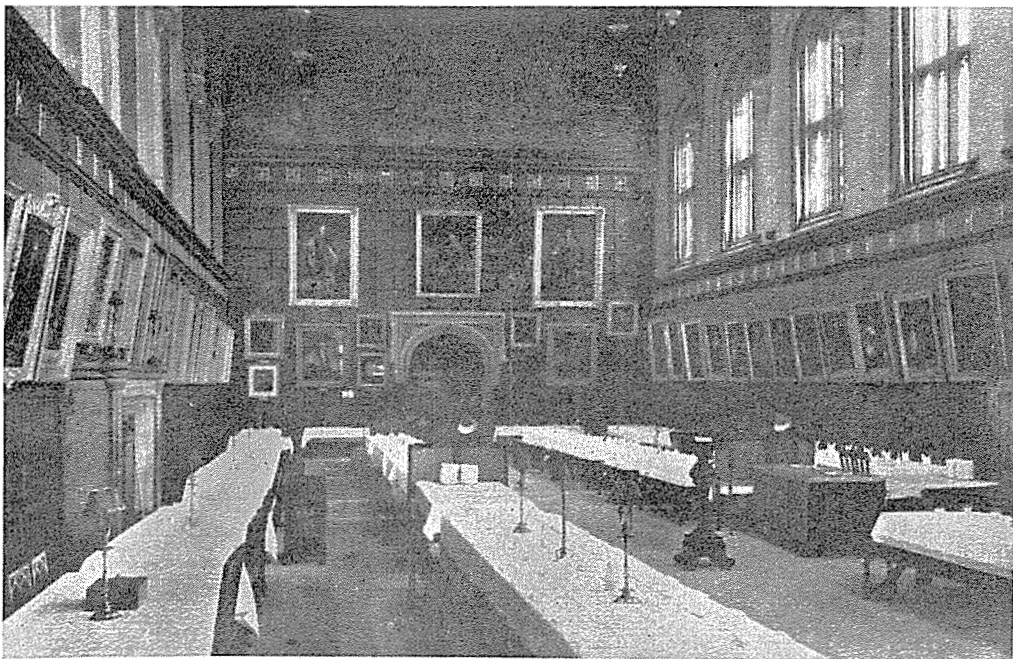
局報學學大西關

(三の其) 學 大 の 洲 歐



The Spires of Oxford

St. Mary's The Radcliffe, and All Souls, from a window in Queen's College



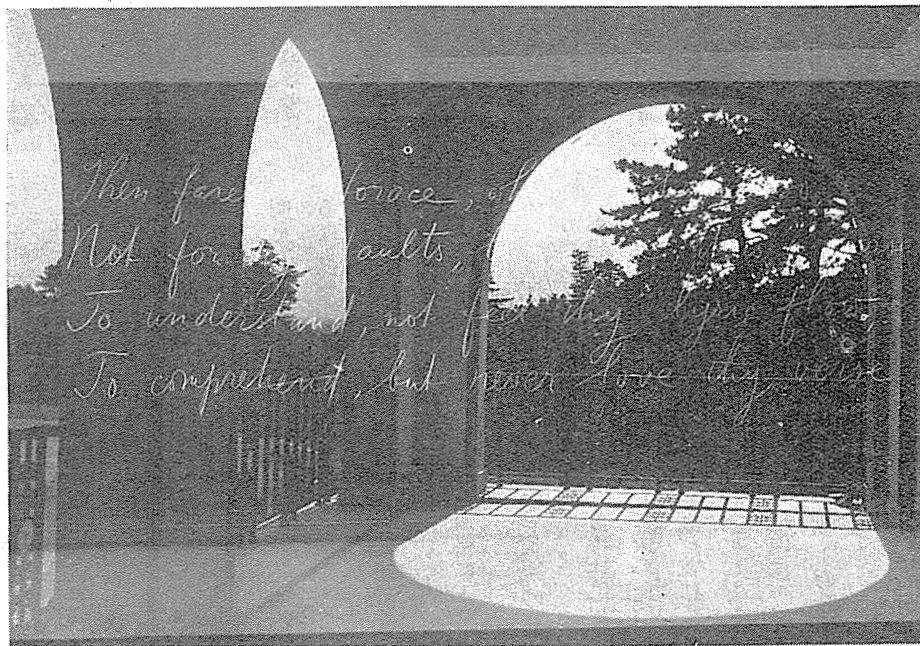
Christ Church Dining Hall

The finest of the Halls of Oxford

關西大學學報 第八十七號

目次

- 表紙——春陽さし（千里山學舎所見）
 挿繪——歐洲の大學（其の三）——水谷揆一教授藏
 銀塊相場と銀爲替……………（四）
 教授 正井敬次
 ヨセフ・シユンペーター教授の講演を聴く（三）
 教授 武田鼎一
 銀行史談……………（五）
 講師 西村勝太郎
 社會主義經濟に於ける經濟的計慮の問題上（九）
 校友 山本勝市
 パック現象學的經濟學序論（完結）……………（四）
 大學院 藤本進治
 學内報……………（三）
 卒業式豫告——校友總會暨に校友懇親會開催豫告——校醫屬託——學内消息——動靜
 校友彙報……………（三）
 學生彙報……………（三）
 巴里追懷（承前）……………（三）
 講師 中村良之助
 高田保馬博士「價格勢力說」……………（六）
 經濟學部 佐伯三郎
 圖書館彙報……………（四）



春はクラブハウスにも……
 （英字は Byron の “Childe Harold's Pilgrimage” 第四巻の一節）

銀塊相場と銀爲替

教授 正井 敬次

銀の問題が喧しき今日、外電は更に倫敦銀塊相場の十三片臺割れを報ず、斯くして銀問題は今後に於て益々重大ならんとするの狀勢である。この際、私は茲に銀塊相場並に銀爲替に就て簡單なる叙述を試み以て一般讀者の參考に供したいと考へる。(二月五日)

一、倫敦銀塊相場と金銀の比價

今日、世界諸國のうち貨幣制度の上に於て銀本位制度を採用せる國は中華民國のみである。是に於てか、金は世界的の相場を持たないが(各々の金本位國に於て金の輸出入が自由とせられる限り)、銀は世界的の相場を有すると云ふ結果が生ずる。而して銀に就ては、倫敦又は紐育と云ふが如き世界的の市場に於て日々の相場が建てられ、其相場が世界の銀價を支配すると云ふ事情が存在するに反し、金は獨り上海の金地市場に就て孤獨なる市價(銀の貨幣單位を以て示されたる相場)を持つに過ぎないと云ふ狀態に在る。

銀の世界的中心市場は倫敦である。然らば倫敦の銀塊相場に於て稱へられる所の十三片とか十二片とかの價格は、如何なる質の又如何なる量の銀塊の價格であるかと云ふに、それは千分の九百二十五品位の銀一オンスを英國貨幣單位を以て評價せる價格に他ならぬのである。千分の九

百二十五品位の銀とは即ち英國銀貨の素材たる銀であつて、英國にてはこの品位の銀を標準銀(Standard Silver)と云つてゐる。

次に金銀の比價とは、金一に對する銀五十とか六十とか云ふが如き價格の割合を指して謂ふのであるが、今倫敦銀塊相場と銀の比價との關係は如何であるかと云ふに、銀の比價は常に倫敦銀塊相場の數字を以て、九四三(詳しく言へば九四二、九九五...)と云ふ數を除したる商に等しいことに定まつてゐる。(九四三と云ふ常數の根據に就ては茲にはこれが説明を省略する)。故に今二月三日の銀塊相場十二片十六分の十三を以てするならば、金銀の比價は實に一對七三・六となるのである。丁度十年前の一九二〇年二月には銀塊相場に八十九片二分の一と云ふ高値があり、比價は一〇・五三であつたことを思へば實に今昔の感に堪へない。蓋し銀價は此十年間に正に六分の一の價格に下落したのである。

二、歴史的に見たる金銀の比價

金銀の比價に就ては随分古き時代に關す文献がある。即ち吾々はB.C.二千年代のバビロン王國に於て銀の比價が一三・五(金一に對するの意、以下同じ)の見當であつたこと、並にB.C.四百年頃のギリシヤに於ける銀の比價が一二の見當であつたことを知り得るのである。ローマに於ては共和政治の時代には銀の比價は一二の見當であつたが、其後金鑛の發見が金價の下落を促し、シーザーの時代には銀の比價は八・九にまで上つたと言はれてゐる。ローマ帝國衰亡の時代に於ては金が更に騰貴した蓋し世狀の不安なる際には身に著すべき最も高價にして且便利なる貴金屬が最も重寶なる財産と看做さるゝに至るが故である。但し當時に於け

る金銀の比價に就ては確實に之を知ることが困難であるが、恐らく銀は一五乃至一八見當の比價を保ちしものと思はれる。

中世紀に於ては、銀の比價は大體に於て一〇乃至一二の間に在りしものゝ如くである。即ち一五二四年獨逸に於て、初めて發布せられし貨幣鑄造に關する法令によれば、銀は、一・三八の比價を有するものと定められた蓋し十六世紀以後銀價は漸次下落せしものゝ如く、ゼートベヤー (Seether) によれば、銀の比價は一五〇一—一五二〇年間に於ては一の見當であり、一六〇一—一六二〇年間に於ては一二の見當となり、一六六〇—一六八〇年間に於ては銀價が急落して銀の比價は一五となり、十八世紀中に於ては一體に於て一五を中心として浮動するの狀態であつたと、云はれる。然るに十九世紀の初め佛國に於て複本位の貨幣制度が採用せらるゝに及んで、銀價は更に安定の度を増し、其後一八七〇年頃までの七十年に亘つて銀の比價は、一五・五を中心として微動するに過ぎないと云ふ狀態に在つた。

一八七三年は世界の貨幣制度に於ける革命期であつた。即ち其年の前後に於て、歐洲に於ては獨逸其他多くの國が銀本位を捨て、金本位の貨幣制度を採り、佛國其他の複本位國が銀の自由鑄造を禁止したのであつた。是に於てか、右の如き事情を前にして銀價は既に一八七〇年頃よりして漸落の步調を取り、十九世紀末には銀の比價は遂に三四乃至三五に下つたのである。然らば二十世紀に入つてよりの銀價の狀態は如何であつたかと云ふに、銀の比價は一九〇〇年には最高三四であつたが、一九〇九年には四〇となり、世界大戰開始の一九一四年には比價の平均は三七・三七と云ふ數を示した。併しながら休戰後の三年間即ち一九一八—二

〇年間は銀價の暴騰時代であつて、比價の平均は一九一八年には二〇、一九一九年には一六・五、一九二〇年には一五・三と云ふ數を示したのであるが、其中の一九二〇年二月に、比價の一〇・五三と云ふ近世未曾有の銀の高値があつたのである。然るに一九二一年以後には銀價は漸落の步調に轉じ、一九二六年には比價は三三の見當となり、一九二七年以後に於ては銀價の落調益々急なるものがあり、一九三〇年六月には比價六八の見當に相當する所の銀相場の暴落があり、更に一九三一年二月の今日に於て銀價は比價七三・六以下にまで慘落したのである。

以上は有史以後今日に至るまでの間に於ける銀價の簡單なる歴史であるが、今以上の叙述を一層簡單ならしめんが爲に、私は銀價の歴史を四つの期間に區別し、而して各々の期間に於ける銀價の大勢を示してみたいと考へる。即ち左の如き意味に於て銀價の大勢を示すときは、それは次の如きものとなる。

時代

金一に對する銀の比價

一六五〇年迄	一〇——一三
一六五〇——一八七〇	一二——一六
一八七〇——一九一八	一六——四〇
一九一八——一九三一	一〇・五——七三・六

(最後の期間に就ては比價はその最高と最低とを取る其他の期間に就ては各年に於ける大體の平均比價を取る)

三、貨幣制度と銀價

貨幣制度上の言葉に自由鑄造と云ふことがある。其意味は何であるかと云ふと、例へば金本位國に在りては、何人にも自由に且無制限に金地を政府の造幣局に持參して之を金貨に鑄造して貰ふことが出來ると云

ふこと、換言すれば政府が法定の價格にて人民より金塊を買上げ、賣手の欲する所に従つて金貨又は中央銀行の兌換券にて其代價を支拂ふの義務あることを、法律を以て規定することが、即ち自由鑄造の制度である。斯の如く自由鑄造とは即ち政府が法定價格（例へば我國にては純金二分を一圓の割合）にて本位貨幣金屬の買上を保證する所の制度である。従つてそれは、本位貨幣金屬の賣下、換言すれば正貨兌換の保證と共に本位制度の完全なる運用と云ふ點に關して缺くべからざる條件をなすものと看做されてゐる。是に於てか、若し世界に完全なる銀本位國が多く存在するときは、銀の賣買は多くの國に於て一定の價格の下に保證せらるるが故に（換言すれば銀が貨幣となり得るが故に）、世界に於ける銀の過剩と云ふ現象は發生せざるに反し、銀本位國が少數なるときは右の如き現象が當然に發生せざるを得ないのである。

蓋し十九世紀の初頭に至るまでは世界各國の貨幣制度に於ては銀本位が斷然優勢であつた。併しながら十八世紀末に、英國が複本位制度を廢して銀の自由鑄造を禁止し、一八一六年には純然たる金本位制度を確立することとなり、又一八〇三年には佛國で金銀の法定比價を一對一五・五と定めて、此比價に基きて金と銀とに就て自由鑄造を許す所の複本位制度を採用するに至つて、世界の貨幣事情は少しく複雑となつた。

英國が複本位を捨て、金本位を取り佛國が新たに複本位制度を採るに至つた事情に就ては之を措いて言はず、唯其結果に就て一言するときは當時歐洲大陸方面の諸國は佛國を除きては皆銀本位國なりしが故に、一方金本位國たる英國と他方大陸の銀本位諸國との間に佛國と云ふ複本位國が介在することは總ての國に取つて好都合であつた。是に於てか佛國

の複本位制度なるものは佛國自身に取つても、また世界に於ける金銀比價の安定と云ふ點より見るも、それは實に結構なる制度であつたと云ふことが出来るのである。斯の如くにして、既に十七世紀末より十八世紀中を通じて百餘年の間一五見當の比價に於て安定せし銀價は、更に十九世初頭に於ける、比價一五・五にて、自由に金と銀とを交換すると云ふ佛國の複本位制度の出現に依つて、一層その安定を保證せられることとなつた。而して斯の如き安定の時代は佛國の複本位制度が健全でありし間即ち一八七〇年頃まで續いたのである。但し一八六五年頃には佛國の複本位制度も單獨にて之を維持することが困難となつたものと思はれるのであつて、その年には伊太利、瑞西、白耳義の三國を佛國が誘ひてラテン貨幣同盟なるものを組織して、複本位制度の勢力を鞏固にするの策が講ぜられたのであるが、併しその後に来るものは複本位制度に對する幸福なる運命ではなかつた。

一八七〇年の普佛戦争は佛國より多くのものを奪つたのであるが、その中には複本位制度までが含まれてゐた。即ち獨逸は佛國より得たる巨額の賠償金（金にて五千萬ポンド）を資金として一舉に金本位制度を採用することとなつた（一八七二）。同時に和蘭、瑞典、丁抹等の銀本位國が皆獨逸に倣つて金本位國となつた。是に於てか、これ等の諸國よりは複本位のラテン諸國に向つて銀の洪水が襲ひかゝつた。この銀の洪水を比價一五・五にて堰止めることは到底困難である、是に於てか、複本位制度は敗退せざるを得ない。右の如くにして、一八七三年には佛國其他の複本位國に於ては、遂に銀の自由鑄造禁止、即ち比價一五・五を以てする銀買上の停止が行はれたのである。斯くして十七世紀末以來約

二百年間に亘つて堅固に維持せられたる一五——一六見當の銀の比價には波瀾が生ずることゝなつた。

一八七三年の歐洲大陸諸國に於ける貨幣制度の改革は銀價二百年の夢を破るの結果となつたのであるが、更に十九世紀末より二十世紀初頭に於ける世界諸國に於ける貨幣制度の改正は、銀價をして遂に比價三五乃至四〇見當の安値に落ち付かしめるの結果を齎した。即ち日本は一八九七年に銀本位を捨て、金本位を取り、印度は一八九九年に金爲替本位と云ふ特殊の制度を採用して銀の自由鑄造を禁止し、一九〇〇年には北米合衆國が完全なる金本位國となり、それと相前後して南米の諸國が金本位又は金爲替本位に類似せる制度を採るに至つた。斯の如くにして、一九〇〇年より以後銀の比價は三五——四〇と云ふ見當を以て正常の割合とするに至つたのであるが、それは一に世界弱國の貨幣制度が支那を除いては完全に金本位又は金爲替本位に統一せられし結果であると云つてよいのである。

最後に最近數年間に於ける銀價の暴落と貨幣制度との關係は如何であるかと云ふに、一九二五年の前後に英國を初め歐洲の諸國が、金貨を國內に流通せしめざる金本位制度とも云ふべき金塊本位又は金貨本位の制度を取つたことは、制度そのものとしては直接に銀價に影響する所が多いと思はれるのであるが、併しながら右の如き制度は要するに諸國に於ける金の缺乏を意味するものであり、従つてその實際上の結果は諸國間に於ける金の爭奪戰を激しからしめしものであつたと云ひ得る。之を換言すれば、世界諸國に於ける金本位制度の複舊又は金解禁と云ふことが各國をして金に就て神經過敏ならしめ、其結果銀價をして下落せしむる

に至つたと云ふことは之を否定することが出来ない。

尙、銀價に影響する所の具體的な貨幣制度の改正としては、一九二七年の印度貨幣制度の改正を擧ぐることが出来る。印度は銀ルーピーを以て本位貨幣とする國であるが、一八九九年に銀の自由鑄造を禁止、英國との間の爲替を法律を以て一ルーピー對十六片と定めて、所謂金爲替本位制度なるものを設けたのである。然るに一九二七年には法定宿替歩合を一ルーピー對十八片に變更し、而も政府は其法定價格を以て金の買入を行ひ、又金或は對英電信爲替の賣下を行ふと云ふ制度を制定した。此は蓋し從來の金爲替本位制度の變更、又は廢止であり、同時に一種變態的な金本位制度の採用である。而して其結果は印度に於ける銀の過剩と云ふことを招來することが當然であつた。

右に依つて見るに、最近に於ける貨幣制度に原因せる銀價の下落に、諸國の金解禁と印度の貨幣制度改正とにその端を發せるものと云ひ得るのである。

四、銀生産高と銀價

世界に於ける銀の生産高は古き時代に就ては之を精密に知ることが困難である。併しながら、今ゼイトベヤーの調査に基きて概略の數字を擧ぐるならば、一六五〇年頃に於ける一ケ年の平均生産高は一〇——一二（單位百萬オンス、以下同じ）の見當なりしものゝ如く、次に一七五〇——一八〇〇年の間に於ては一ケ年平均産高一八——二八の見當であり、一八一〇——一八七〇年の間には右同様の數字は二〇——四〇に上り、一八七〇——一八八五年の間には六〇——九〇に増加せしものゝ如くである。次に北米

合衆國造幣局年報によれば、一八八六—一九〇〇年の間に於ては一ヶ年平均産高一〇〇—一六〇見當であり、一九〇〇年より戦争前の一九一三年迄の間には右同様の數字は一六〇—二三〇に上つてゐる。而して右の年間に於ては一九一二年の産高二億三千萬オンスが最高であつた。

以上は戦争前までの銀産出高の概數であるが、併し斯の如き簡單なる數字に依つては銀の産出高と銀の價格との間の關係を説くことは出来ない。唯右の如き銀産高増加の大勢よりして誤なく推斷し得る所の一事はたとへ過去に於ける世界人口の増加と工業の發達とが貨幣並に工業に關する銀の需要を年々に増加せしめ得たとしても、併し一八七三年に於ける歐洲諸國の貨幣制度改革、一九〇〇年前後に於ける金本位制度の世界化による貨幣に關する銀需要の激減を考慮するときは、右の如き銀の産高は各時代毎に銀の比價をして低からしむる所の原因をなすに至るべきが自然であると云ふことである。

併しながら注意すべき點は、ゼ・エス・ミルが貨幣價値の變動を説いて貨幣價値は長期的には金屬の生産費によつて、而して短期的には貨幣の需要供給によつて決定せられると云ひしことは、正に銀價に就て適用せられ得ると云ふ一事である。即ち吾人は銀生産高の大勢より見るときは銀價は長期間に亘つては大體に於て銀の生産費換言すればその生産量の關係によつて決定せられしものと見ることが出来るのであるが、併し最近數年間の銀相場に就ては必ずしも銀の生産費に基きて、其變動を論ずることが出来ないのである。

一九一四—一九二二年の間に於ては銀産高は前の期間に比して減少した、即ち一九一二年には二億三千萬オンスに達したる産高が、右の年間

には最低一億七千萬最高二億オンスと云ふ年産高となつた。而して右の年間には一九二〇年の銀價の暴騰があつた。然らば右の銀産高減少と銀價騰貴との間には如何なる程度の關係があつたであらうか。

蓋し戰時に於ける銀産高の減少は緊急なる戰時工業に向つての生産要素の集中に原因するものと思はれるのであるが、銀の減産は當然其價格を高めるの原因となつたに相違ないが、併しそれは銀價暴騰の主因ではなかつたと考へられる。一九二〇年を絶頂とする所の物價の世界的騰貴は、兩三年間に亘る所の歐洲交戰諸國に於ける急激なる物資の需要に原因する、戰時並に戰後の數年間に亘つて歐洲諸國は半大陸と亞細亞とより萬般の貨物に就て大量の供給を受けた、其結果歐洲の金は米亞の兩大陸に向つて流出した。斯くして戦争成金としての米國と日本其他の諸國に於ては當然購買力の増加と物價の騰貴とがあつた。而して世界は總てが好景氣のオーケストラに連れて舞踏した。此際銀の如きは多少生産高の増加があつたにしても、尙其價格は騰貴したであらう。何となれば、第一に銀は一般商品であるから、第二にそれは支那に向つて發せられる世界各國の物資の注文に對して支拂はるゝ所の貨幣であるから、第三にそれは好景氣の支那と印度とに於ては特に需要が増加せし貨幣金屬であるのみならず、又金本位諸國の補助貨幣金屬であるが故に、右の如くにして倫敦銀塊相場の八九・五片は、實に銀の産出高と云ふが如き問題を超越したる世界的好景氣の産物であつたのである。

然らば次に最近數年間の銀價と銀産出高との關係は如何であるかと云ふに、一九二三年以後今日に至るまで世界の銀産高は毎年二億五千オンスの見當に達してゐる。而して其年間に於ては別に産高に急激なる變化

は生じておらぬ。今最近一兩年間の變化を見るに、世界銀產高の大部分を占むる所の米大陸諸國に於ける產高は一九二九年よりも一九三〇年に於て少しく減少してゐる。即ち右各國の產高を示せば次の如くである。

米大陸の銀產出高(單位一萬オンス)

	一九二九年	一九三〇年
メキシコ	一〇、八七〇	一〇、五七〇
合衆國	六、〇二〇	五、〇四〇
カナダ	二、三二〇	二、六二〇
南 米	二、八六〇	二、二七〇

右に依つて見れば、一九三〇年の中頃に於ける銀價の急落と更に本年昨今に於ける銀價の慘落とに關しては、其處に何等銀價と銀產出高との間に於ける因果關係を發見し得ないが如くである。是に於てか私は、長期間に於ける銀價の大勢と云ふ點に就ては別問題であるが、併し一兩年間に於ける銀價の變動に就ては、其原因の探求に關して銀の產出高を問題にすることは間違つてゐると考へざるを得ない。

五、銀相場と銀爲替

銀爲替(支那爲替)は銀塊相場に依つてその相場が支配せられると云はれる。併しながら一面より見るときは、銀塊相場はまた銀爲替の相場によつて支配せられると云ふことも出来るのである。是に於てか、銀相場の問題に就ては、銀爲替の性質並に銀爲替と銀相場との因果關係を研究することが大に必要である。

先づ支那の貨幣組織を見るに、支那には「兩」を單位とする所の貨幣と「元」を單位とする貨幣との二種の貨幣がある。「兩」單位の貨幣は即ち馬

蹄銀(銀鋼と云はれる)であるが、これは一箇の價值が五十兩程に相當する所の銀塊であつて、日常の小額取引には使用せられざるものなるが故に、それは支那に於ける一般的なる流通手段としての貨幣ではなくして價值貯藏手段又は資本移轉手段としての貨幣であると云ふことが出来る。即ち馬蹄銀は主に錢莊、銀行、大商人、政府等に依つて授受せらるゝ所の資金としての貨幣に他ならぬのである。

次に「元」單位の貨幣は如何なるものであるかと云ふに、それは墨西哥銀貨並に支那固有の鑄造貨幣を含めて云ふ所の弗銀貨と多くの銀行に於て發行せらるゝ所の弗の兌換券とである。而してこの弗銀貨なるものは馬蹄銀とは異り單位價值の小なるものなるが故にそれは支那に於ける一般的流通手段たる貨幣であると云ふことの出来るものである。蓋し、支那全土が抱藏する巨大なる人によつて構成せらるゝ所の支那の産業社會が産業景氣の消長によつて需要供給を増減する所の一般的の支那通貨なるものは實にこの弗銀貨なのである。是に於てか、支那の經濟的中心地たる上海に於ける弗貨の需要供給なるものは、一に奥地の産業上の季節又は景氣によつて左右せらるゝこととなり。斯くして上海に於ては兩を以て示す所の弗貨の相場が建てられるのであるが、この弗相場こそは實に支那固有の通貨の貨幣價值を示すものであつて、若し爲替相場なるものが貨幣價值の相場であるとするならば、弗相場は實に支那爲替の決定に就て重要な役割を勤めるものと云はねばならぬ。

支那の外國爲替相場は「兩」單位の貨幣に就て建てられる、即ち上海爲替は上海兩、漢口爲替は漢口兩と云ふが如く、それ／＼に一定の純銀量目を有する所の各地の「兩」貨幣に就て各地の爲替相場が建てられる。然ら

「ば此等の銀爲替(例へば上海爲替)の相場は、これが決定に就て何を要素とするものであるかと云ふに、それは先づ第一に倫敦銀塊相場であり、第二には上海に於ける弗の相場であり、第三には支那箇有の金融業者間に於ける金利である。蓋し一定の倫敦銀塊相場の下に於ける上海兩の對英爲替の平價は $\frac{1}{100} \times 1.172$ であるとせられる(1.172は或は1.18とせられる、此常數の根據に就ても之が説明は省略する)。然るに若し銀爲替の相場は即ち銀塊相場に他ならぬものならば、銀爲替相場は常に右の如くにして算出せられたる爲替歩合に一致すべき筈である。併しなから事實は必ずしもさうではない。然らばそれは何故であるかと云へば實際上の銀爲替相場の決定に關しては、銀塊相場の外に上海に於ける支那通貨の需要供給狀態を現はす所の弗相場と、上海に於ける資金の需要供給狀態を現はす所の金利とが、その要素となつてゐる。即ち銀爲替相場なるものは、支那貨幣の實體である所の銀の世界的市價に配するに、支那に於ける貨幣の需要供給と云ふ事實を以てすることに依つて、初めて決定せらるゝ所の相場であるのである。

銀塊相場は銀爲替相場を決定する所の總てではない、併しそれは銀爲替の決定に關して最も重要な要素をなすものには相違ない。然るに茲に注意すべきことは、日々に變動する所の銀塊相場に對して決定的の要素となるものは果して何であるかと云ふ點である。元より銀塊相場は倫敦とか紐育とかの銀塊市場に於ける銀の現物又は先物に對する賣買の狀態によつて定まるのであるが、併し銀塊相場は一面に於てはまた銀爲替相場によつて直接の影響を受けるものなることを忘れてはならぬ。即ち今上海に於て昨日の倫敦銀塊相場に基く所の平價よりも更に安き「兩」の

爲替相場が建られたとする、然るときは明日の倫敦銀塊相場は「兩」の爲替相場の影響を受けて、昨日よりも更に安き相場を現出することゝなるであらふ。

左の如くにして吾人は、銀塊相場と銀爲替相場とは互に循環的の因果の關係を持つものであると云ふことが出来る。是に於てか、斯の如き循環關係の外に立ちて、此關係に對して第一次的の因素となるものは何であるかとの問題が、銀相場の研究に關して最も重要な意義を有することゝなる。然らば斯の如き因素は何であるかと云ふに、私は其は長期間の問題としては、世界に於ける銀の存在量の増減であり、短期間の問題としては銀貨國に於ける貨幣需要の増減殊に銀爲替國の中心的貨幣市場に於ける貨幣需要の増減であると考へる。

六、近時に於ける銀價暴落の原因と

銀價安定策

最近に於ける銀價の急激なる下落に關しては別問題として、此一兩年間に於ける銀價の下落に就て其根本的原因を尋ねるときは、私は之を世界各國に於ける金本位制度の作用の復舊に關聯して發生せし、各國の重金主義的政策の結果に求むべきものと考へざるを得ない。

私は三年前に關西大學専門部に於て「海外經濟事情」と云ふ講義を始めし際、世界に於ける金の偏在が世界の經濟に對して面白からぬ結果を齎すの懸念あることを説いたのであるが、私のこの心配は不幸にして杞憂ではなかつた。而して今私は銀價の暴落を以て世界各國の重金主義的政策に歸せんとするに及んで、更に再、世界の經濟が如何に金によつて累

せらるゝ所多きかを考へさせられざるを得ない。

多くの貨幣理論家が言ふが如くに、貨幣は商品の影の如きものであるならば、産業上の景氣には貨幣的原因は存在せない筈である。併しながら貨幣は今日の經濟組織の下に於ては單なる手段ではなくして一の目的である。従つてそれは、商品と離れて獨立に、その發生と存在と需要供給とが論ぜらるべき性質のものである。是に於てか、世界の産業景氣に對する貨幣側の原因として、金解禁—緊縮政策—貨幣價值の一般的騰貴—物價下落、と云ふ過程の進行が承認せられざるを得ざる事となり、次に多くの金本位國に於ける以上の如き貨幣並に物價の事情は原料供給國としての支那並に印度の輸出貿易に打撃を與へ、此等の銀貨國に於ては不景氣—銀貨の過剩—爲替市場に於ける金資金に對する銀資金の價值の下落—即ち銀爲替相場下落、と云ふ一聯の現象が發生する事となるのである。而して斯の如くにして導かれたる銀爲替の下落は、それはやがて銀塊相場下落に對して原因をなすものたる事は前述の如くである。

右の如く最近一兩年間に於ける銀相場下落は、銀の生産量などの原因に依つてではなく、其根元を金本位諸國の政策に置く所の世界的貨幣事情に因つて導かれ來つた所の結果である。然らば本年昨今(二月)に於ける銀價の急落に就ては之を如何に見るを適當とするやと云ふに、現今の時期は上海にては奥地より弗貨の逆流を見る所の金融緩慢の季節である。故に目下の處上海爲替は大體に於て下落の傾向を有するものと見らるべき際である。斯の如き際に當つては、豫て銀相場に就て恐怖的となれる上海爲替市場の爲替銀行、又は爲替投機商人にして、爲替取引上金資金の賣持(或は銀資金の買持)を有する者は、上海金塊市場に於ける金

塊相場の買出動を急ぐことゝなるべく、又倫敦銀塊市場に於ける賣手としての活動を急ぐことゝなるべきが至當である。故に昨今に於ける銀價の暴落に就ては、他に特殊の事情の存在することを知り得ざる私に於ては右云ふが如き、支那の金融季節の關係に加ふるに、爲替市場に於ける金銀兩種資金の賣買が貿易關係又は人氣の關係にて一方に偏したる結果に原因するものと云ふより他に説明の仕方がない。

最後に銀價暴落の對策に就ては之を如何に論ずることが適當であり得るか。蓋し根本的に云へば、今日の世界に於て支那一國が銀本位國として存在することが銀價問題に對する禍根をなすものなるが故に、支那の貨幣制度をして、先づ金爲替本位制度に改正せしめることが最良の銀價對策であるかも知れぬ。併し斯の如き支那の貨幣制度改正の問題に就ては其處に大に論すべき點がありとするも、それは以て今日に於ける當面の銀價對策となすには足らぬ。即ち其は寧ろ將來の問題である。

目下の對策としては米國にては對支貸付金が問題とせられておる。若しそれが實行せらるゝならば銀價の安定に對して幾分の効果はあるであらふ。併し私の考によれば銀價の暴落は金本位國全體に共同の責任が豫せらるべき問題である。故に金本位國にして支那と貿易關係の密接なる日米英の諸國が聯合して、各自相當の金額に於て支那に對して金資金のクレデットの設定を許諾することが最も適當なる銀價問題解決の方法ではないかと思ふ。元より各國とも經濟難の今日、之を現實の問題とするには種々の困難が伴ふことであらう。併しながら銀價の暴落が各國の貿易に不利益を齎らさないならば別問題であるが、若し銀價の安定が各國

ヨセフ・シュンペーター

教授の講演を聴く

教授 武田 鼎一

昭和六年初春の我國經濟學界を飾る一大光彩としては私は獨逸ボン大學教授ヨセフ・シュンペーター博士の來朝と、そうしてその講演を舉げねばならぬ。私は同博士の神戸商業大學に於ける二月七日、九日及び十日の三回の講演に列するを得たことを衷心欣快とするものである。前二回の講演は商業政策と經濟學の發達に關するものであつたが故に、特に取り立てゝ茲に記述する價值を認めないけれども、最終日の利子論は同博士獨特の靜態經濟論を基礎とする動態利子論であつて最も傾聴に値するものであつた。然しながら私は同博士の靜態無利子論には根底より反對するものである。私は今同博士の著書の一なる“*Theorie der wirtschaftlichen Entwicklung*”の中に記述されたる資本利子論に關説することとを避けて専ら同博士の講演と講演後の討論會に於ける説述を引用しつゝ、反對説を述べて見たい。

博士は利子は現在價值と將來價值との差なりとしてベーム・バウワーの打歩説を遵奉する。此點に於て博士の利子本質論は何等の新味を有するものではない。然しながら博士は利子は資本利用の對價なりとの説を攻撃してかゝる定義は純理論的でない何故ならば此定義に於ては資本

の意義を説明せねばならないからであると云ふ。博士の斯の如き攻撃は當を得たものであらうか。博士は利子現象は資本主義社會に於てのみ生ずるものであつて全共產の社會には認められないものであると云ふ。然らば資本主義社會を前提とする利子論に於ては資本の説明は最早不必要であるが故に、利子は資本利用の對價なりと云ふ定義は何等の添加的説明なくして妥當するものであると云ひ得る。従つて博士の非難は不當であると云はなければならぬ。私は博士に反して利子打歩説こそ私有共產兩種社會の何れにも適用され得る利子説であつて經濟の歴史性を無視するものなりと非難したのである。共產制社會に於ても現存價值と將來價值の差はあり得べきであるから、打歩的利子は必然的に生ずるものと言はなければならぬ。

次に私は博士の靜態無利子論の理論的根據を一瞥したい。博士は自由競争が完全に行はれたる場合に於ては企業は地代と勞銀を齎らすも資本利子を獲る能はずとし自由競争の完全に行はれたる狀態を靜態と唱へて靜態無利子論を主張される。然しながら博士の言ふ如き企業それ自體の存立を拒否せざる完全なる自由競争があり得べきであらうか。自由競争の完全に行はれることは競争企業の完全なる消滅を意味するものである。それは恰も戦争が完全に行はれたれば交戦兩軍が全滅すべきと同様である。博士が企業の成立要素たる資本、土地、勞働の三者の中の二者にのみ地代と勞銀なる所得を齎らすことを許す如き自由競争を完全に行はれたる自由競争と云ひ得べくんば私は一步を進めて企業成立の根本要素の一たる資本にも同時に利子所得を齎らすことを許す如き自由競争こそ眞に完全に行はれたる自由競争と呼びたい。相互に競争すべき企業

の成立は土地、資本、勞働の三者を必要不可欠の要素とする。而して土地と資本と勞働は私有制社會に於ては地代と利子と勞銀とを獲得し能ふが故に企業成立のために結合するものである。若し土地にして地代を勞働にして勞銀を資本にして利子を得能はざるならば企業結成の要素として、此等の三者はすべて参加を拒絶するであらう。資本が利子を得能はざる狀態に企業が陥るならば資本はかゝる企業から逃出して、他の利子收得可能なる企業に移るか、又は企業界を離れて退藏さるゝに到るであらう。即ち博士の所謂靜態に於ては企業はその結成を解消すべき運命にあるものと云はなければならぬ。博士の云ふ靜態は眞の靜態にあらずして自由競争の行はるゝ經濟社會の一時的、或は短期的なる無利子狀態である。かゝる靜態が長期的なるものとすれば資本は完全に斯の如き企業から逃じし、企業それ自體も亦從つて全く消失するに到るであらう。再言すれば博士の言ふ靜態は眞の靜態にあらずして存立企業によつて形成さるゝ經濟動態の一であると云はねばならぬ。即ち動態經濟の短期的現象に於て無利子狀態が認識さるゝに過ぎないのである。相互に競争すべき企業の完全なる存立によつてのみ正常なる經濟狀態を考へることが出来るのであるから企業の存立を許さざる如き狀態を假定して、その假定の上に經濟理論を構成して行くことは甚しく失當である。企業の存立を危くする如き過度の競争は永續するものにあらずして、かゝる過度の競争は速かに競争企業相互間のカーテル的結合成立を誘致するものである是即ち私が博士の靜態を動態の一なりとなす所以である。

博士は經濟動態に於ては利子は企業利潤をその源泉として生れ出づるものであるとして利子發生の源泉を企業利潤に求めて居られる。然しな

がら之は歸屬學說から云つても誤りである。利子は企業成立の當初から資本に歸屬すべきものであるけれども利潤は元來無歸屬性のものである利潤の歸屬主格を何者に求むべきであらうか。地代は土地所有者に勞銀は勞務者に利子は資本所有者に歸屬收得される。然らば利潤は何者によつて歸屬收得せらるべきであらうか。或は企業家によつてと云ふものがあるかも知れない。然しながら企業家は企業の經營に従事する一の勞務者であつて、その勞務には勞銀が歸屬するも利潤は歸屬すべきではない。私は利潤は無歸屬性者なるが故に之れを取得するに便利なる地位にある者が強いて自己に歸屬せしめるに過ぎないと説くものである。實際に於て利潤は資本家と經營的勞務者によつて收得されて居る。又企業の危險に對する保險料として利潤は企業主格に歸屬すべしと云ふものもあるが、企業の危險には土地所有者も勞働者も資本家も共に曝露されて居るのであるから利潤はすべての企業關係者に配別歸屬さるべきだと云ふことが出来る。企業は資本利子を齎らすことを前提として成立するものであるから、博士がその所謂動態に於て無歸屬的な利潤を源泉として利子が生れ出づると説くことは誤りである。私はすべての所得は需要者の支拂ふ對價を源泉とするものであると云ふ説を持つが故に、博士の利潤が利子の源泉であると云ふ論を、私の説にまで導いて利子は利潤と等しく需要者對價を源泉とするものなりと説く方が博士の説よりは一段進歩したものと成るであらうと考へる。とにかくに動態に於ても利潤から利子が生れるにあらずして利子は利子として生れ利潤は利潤として生れると説くべきだと思ふ。尤も利潤を純所得中から地代と勞銀を差引きたる殘部なりとするならば博士の説は誤りに非ずと云ひ得るかも知れない

けれども、純粹の利子と利潤とは全く判然と區別すべきであるが故に、かゝる妥協説は排斥せねばならぬ。博士が私の需要利潤母胎説を採用するならばかゝる誤謬から救脱されるであらうと思ふ。

純理論的に見て無利子靜態を假定することは假定するものゝ勝手である。然しながら現實を離れたる假定は現實の中から生れ出づべき經濟理論を邪道に導くものである。現實の或部分を時間的に空間的にイゾリーレンしてそれに假説を求むることは理論抽出の方法として極めて妥當であるけれども、實在的認識の不可能なる抽象的假説を出發點として經濟理論を構築することは正道に即するものと云ふを得ない。博士の靜態無利子論を數學派の主張する、而して等しく博士の採用する均衡原則について考へて見ても誤りなることは一目にして判明するであらう。

需要供給の數量的交換方程式によつて示さる、Gleichgewicht は本質的に何を意味するものであらうか。完全なる均衡は無利子狀態に於て初めて出現すると云ふことは如何にして言ひ能ふか。完全なる企業存立によつて始めて完全なる供給が行はれ、完全なる供給から結果する資本所得を待つて始めて完全なる需要が行はれる。資本所得を缺く國民の購買力は不完全なる購買力でなければならぬ。不完全なる需要を完全なる供給と如何にして均衡狀態に置き能ふや。

企業の相互的競争は勿論供給者としての競争と需要者としての競争に分別考察する必要がある。然しながらシュンペーター博士の意味する競争は供給者としての同種企業相互間の競争であるから供給量は博士によれば完全供給量であると云はなければならぬ。而して供給者は同時に需要者であるが故に、社會全體をとつて考察する時は供給過剰が資本所得

消滅のために生ずるものと云ひ得る。かく論するならば博士の靜態無利子論は不均衡論であると云はなければならぬ。動態を説いて靜態となし不均衡を論じて均衡となす所に博士の學説の根本的誤謬が存する。

然しながら博士は世界に於ける經濟學者中の經濟學者であり、年齒未だ五十を出でず今後の彼の學説の發展は注目に値するものと考へる。博士の如き有數の經濟學者が頻々と我國を訪れることは我國經濟學界の進歩に貢獻する所極めて大なるを信ずる。私はグスターフ・カツセル博士アービン・グ・フイツシャー博士・ゼ・エム・ケインズ博士・アルベール・アフリオン博士等の來朝あらば如何に我國經濟學界が賑ふであらふかを想像して、その實現の速かならんことを祈るものである。(昭和六・二・二三)

附記 本文は博士の講演を聞きたる儘に評せるものであるから聞き誤りの皆無を保證出来ない。従つて誤聞の點あらば速に改訂する考である

専門科目

齒科一般診療 レントゲン科診療

天六齒科醫院
國民保健會本部
國民保健株式會社

事務取締役

江口清重

大阪天六京阪驛前
電話堀川六八八番

銀行史談

講師 西村勝太郎

銀行業の働きに關する歴史として太古から現代に至るまでの全過程は「商業のローマンス」と題する作者エイチ・アール・ポールネに依つて最も簡明に言ひ盡されて居る。曰く「銀行業の事たるや最も古く最も新しい仕事である。商業上の一部門として、又社會分業上に於ける有力なる一部門として分化して來たのは近々三百年來の事である。然し極めて原始的なものとして數千年來、否、天地開闢以來存在して居つたのである」と。而かも、今日貨幣は動態經濟社會體の血液となり、銀行は其心臟であり、全く現代文化の建築を作り上げて居る土臺となつて居る。

一、古代希臘の神殿貯藏庫

基督生誕前二十世紀の古代に於いて、バビロニア人の法律には、「金、銀其の他の品物を保管するため、之を他人に寄託する場合には、其品物の何たるを問はず必ず之を第三者に示して寄託契約を締結して之を行ふべし」とありて財産保管に關する委託行為を認められたのである。又埃及人にも高價なる財物の保管する寶物殿なるものを所有して居つた。乍然、當時埃及人は財物を保管するよりもミイラの保管の方が寧ろ大問題となし、即ち、かの有名なるピラミットは死骸をミイラとして殘念して居る間は靈魂が存在して居ると云ふ信念のもとに建立せられたのである

然るに、時日を経て、希臘には初めて財物の安全貯藏に關する考案がたてられた。元來、希臘はバビロニア及埃及の如く強き中央集權的の國家に非ずして幾多の獨立せる小邦や市に分れて、常習的に互に戰爭し又外冠のために絶えず苦んで居り、戰爭の終熄せる時でも相對峙せる政黨の争のため常に不安の状態であつた。

如斯、常に惱まされたる希臘人は苦き經驗の結果、堅固にして常に不可侵なる安全貯藏の場所を要求し、其適當とする場所は、有識階級者の宗教心と無識階級者の迷信及恐怖心が結合して神殿なるものが、最も安全地帯なりと考へられたのである。是れが即ち古代希臘に於ける眞實の神殿安全貯藏庫で、且又内外國商業銀行機能の嚆矢として認められるものである。

此の希臘の神殿貯藏庫は種々の保管物が寄託され、例へば、貨幣、寶石、金板、銀板、寶玉及重要文書等で、最初は是等保管物に對しては寄託料を徴收せなかつたが、後日に至りて此貯藏庫が神殿の一事務として寶物保管を取扱ふ事となつて以來、一定の料金を徴收さるゝに至つた。猶、希臘神殿が取扱ふ種々の仕事を研究して見る時は現代の銀行機能の多くが存在して居る事柄を發見する事が出来るのである。

二、羅馬隆盛期に於ける銀行業

古代羅馬の銀行家と言へば、單に兩替商の如きを想像するが、當時羅馬に於いても、既に商業は廣汎なる範圍に行はれ、又著しく勃興を來したので、其の結果、羅馬人は完全なる銀行組織を有して居つたのである。羅馬に於ける貨幣制度は紀元前五〇〇年頃までは殆ど發展せず、其頃

漸く銅貨の使用起りたるも、紀元前二六八年頃になつて銀貨を使用するやうになり、貨幣制度も稍々完備の途上を辿つたのであつた。

乍然、當時羅馬に於ける銀行家の仕事は、當座取引、爲替手形の發行貸付及抵當權の設定等現今の銀行家に依つて營まれる多くの業務に従事するのであつた。

羅馬人は銀行業務を行ふに當り、彼等は常に健全なる常識と判斷力とを有する國民性を發揮して、其の適策を行ひ得たのである。アダム・スミスの國富論に言へるが如く「最も思慮ある銀行經營は其國の産業を繁榮ならしむる事が出来るが、其れは單にその國の資本を集めるのみで出来るわけなく、一層よく資本を運用して最も生産的に資本を動かす事に依つてのみ出来るのである」と。即ち、羅馬人は、一方に於ては充分節約して貯蓄すると共に、他方に於ては節約貯蓄に依つて得たる總餘剩價値の表徴たる貨幣を最も安全有利に投資すると云ふ事を閑却しなかつた。現今存在する貯蓄銀行なるものが古代羅馬に存在して居つたと云ふ證據は無いが、而し當時羅馬人の貯蓄する方法として、一に銀行家に依頼し、二には僧侶に保管を託し、三には國家の護衛する金庫に保管したのである。第一の場合に於ける銀行家に依頼は、近時の預金業務と相違せる點なく、即ち預金者は金錢を保管したり、支拂をなすの面倒を省く利益を有し、銀行家は顧客の殘高の存する間は其顧客の振出したる小切手を尊重して取扱つたのである。而して貨幣を特定期間内預け入れられた所謂定期預金に對しては其の預金者に一定の利子を支拂ひたるも、當座預金に對しては銀行は預金者に利子を支拂はなかつた。

猶羅馬市民は、貨幣其の他高價なる財寶を貯藏するに、公の貯藏庫も

政府に依つて設立され、市民は之を自由に使用する權利を有し、羅馬市民の富は安全にして、且つ堅き基礎の上に置かれて居つた。

雖然、共和制時代には貨幣の貯藏庫として國民に貯蓄勤勉を獎勵したる羅馬市民の金庫も、帝制時代に於ては穀物庫に變じ、失職者や、衣食に窮せる貧民に與ふるパンの貯藏庫と化し、かく失職者に對し、永久の職を與へて勤儉治産の道を講ぜず、單に一時の飢を救ふ如き目前の政策に捕はるゝに至つて、羅馬は漸次衰亡に向つたのである。

三、猶太人と銀行業

猶太人は今日銀行業、鐵道業其他各種事業に就いて特權の天才を有して偉大なる商人として認められて居るが、此の優秀なる天才的傾向は猶太人が故郷を持たず又他民族から壓迫されたる苦しみから生じたる他民族に對する反抗的精神の發露と見るべきである。此の猶太人も故郷を追ひ出さるゝまでは、古代文化國民中に於て最も商才に乏しきものであり又一部は農業に、大多數は遊牧の民であつた。故に猶太人は商業上の發達に關しては、幾多の弊害が存したのである。又出埃及記第十二章には「汝貧しきものに對しては高利貸を營むべからず」と又利未記第二十五章にも同様の禁制が認められた。斯かる聖書の禁制が古代を通じて猶太人の間に銀行業を發達せしめなかつた計りでなく、中世の基督教盛なりし時代の銀行業の發達にも甚しき惡影響を與へた。

乍然、猶太人の四周にありし、アツシリア人や西部亞細亞の人々は古代より利子を徵收する事を法律で許されてあつた。於茲、申命記第二十三章に於ては「汝他國の人よりは利息をとるも宜し」と明言されて居る

此の解禁が後世紀に至り猶太人の間に銀行業が發展した源を發したのである。

然るに、相踵いで開かれたる基督教會の總會は利息に對して反對の意を表し、遂に八世紀に至りては高利貸を否認する事が基督教の健全なる主義であると決定した。

該事は舊約全書ばかりでなくアリストートルの「貨幣其れ自體は決して増加せぬ」と言ふ説にも基いて居る。斯くして一一四六年ユウヂエニス法王は凡ての利息を無効なりと宣言し、一一七九年に於てはアレキサンダ三世法王は凡ての高利貸を公然と破門した。此の法王の上諭の結果は、勿論、基督教徒以外にある猶太人に對しては破門と云ふ事がなかつた。故に猶太人は從來より増して重要な商業的機關となり、遂に王や各地方の領主に對して金融上甚だ必要なる地位を保持するに至つた。

更らに、猶太人以外のものが金貸業を營んで居らなかつたので、猶太人は多くの地方、就中、西歐羅巴地方の領主に資金を貸與なし、金貸業者としての猶太人は愈々役立つ地位を占め、又彼の高利貸は可なり廣汎なる範圍に亘つたのである。

四、ヴェニス艦隊と銀行業

十字軍時代に於てはヴェニス海上に覇權を握らしめ、當時ヴェニス人は「羅馬帝國滅亡後は羅馬帝國の四分の三は吾々ヴェニス人に據つて相續された」と公言された位であつた。殊に、ヴェニス人にとつては宗教よりも商業の方が遙に重要なもので、オルセロ二世は九九一年に於いて既にモハメツド人と通商條約を締結し、而も此の時代に於いて中世に

於ける最初の硬化を鑄造したる市立造幣局をさえ有して居つた。然し、ヴェニスをして、大いに發展せしめた所以のものは十字軍である。

其後、ヴェニスは海上に益々勢力を振ひ、大いに貿易の振興に努め、國力の増進を圖るに至り、單に、ヴェニスは戦争、政治、外交等總ては皆貿易擴張と云ふ唯一の理想から發した。然し、其の支配權は漸次大貴族の掌中に歸するに至り、遂に一三〇八年には總ての權力は當時有名な十人會 Council of Ten の手に弄ばれた。然して、貿易本位に依つて組織されたる都市國家に於ては金融及銀行業は最初から必要なる事として發達を齎したことは勿論の現象である。一一六〇年政府が數人の豪商の手から十五萬銀マークを借入れてヴェニス銀行の創設の端が開かれ、更らに、ヴェニスはコンスタンチノブルとの戦争のために軍需品調達費として強制公債が發行され、其の結果ヴェニス政府の財政的責任は愈々重大となつた。

夙に、ヴェニスに於ては銀行業に關する法規は存在したるが、其内容は頗る寛大であり、又充分適用されては居らなかつた。又其業務に就いて見るも、貿易擴張の觀念から、ヴェニス銀行業者は海外代理店に送金するため爲替手形の發行が其主眼として行はれた。然しながら一三一八年からは預金貸付業務を取扱ふ近代的銀行業態を發揮なし、貴族の大部分銀行家となつた。

當時ヴェニス銀行家に營まれた貸付は船舶を抵當とし、貸付利息は非常に高率であつた。其狀態はシェークスピアの著「ヴェニスの商人」に明記されて居る處である。

遂に一五八七年元老院の決議に依り、最初のヴェニス國立銀行たるバ

ンコ・ディ・リアルト Banco di Riato を設立し、次いで一六一八年にはヴェニス銀行として知られたるバンコ・デル・ゲロ Banco del Giro が設立された。是等二銀行は確實なる資本金はなく單に政府の指揮の基に貯蓄機關としての業務を營んで居つた。勿論、政府及個人から資金を預つたが殊に、個人の資金を預る場合には一定率の手數料を課せられた。

又カメラ Camera と稱へられた銀行は政府に多額の貸付をなし、十四世紀の終りには二十萬ダカットの利子を政府から受取つて居つた。此の銀行は特別の許容を以つて、外國人がカメラ銀行の株主になる事が許され、ラベンナの僧正は一萬二千ダカットに相當する株を有し、ミランの和蘭人は十萬ダカットに相當する株を所有したと云ふ事である。

乍然、當時のヴェニスの銀行は政府から強制的に貸付を迫られたので一度ならず支拂停止の餘儀なきに至りたる例も存するのである。故に、ヴェニスの銀行業は政府の無理な要求の結果繁榮することは出来なかつた。

ヴェニス末期に於ける銀行の歴史は、單に金融上に政權を濫用したる名残を止めて、全く昔日の財界勇士の面影を失つてしまつた。

一九三一・一 (未完)

「銀塊相場と銀爲替」——第一頁より續く——

の貿易に利益であり惹いては世界景氣の回復に幾分の効果があるものとするならば、各國は之に對して多少の犠牲を支拂ふべきが當然である。而して若し犠牲を拂ふとならば、純粹なる貿易資金に關してクレヂット

を與へると云ふ程度のことは最も小なる犠牲ではないかと思はれるのである。

併しながら元々理論上より見るときは、銀價が銀の投機的賣買によつて騰貴せらるゝことは貿易上有害であるが、併し自然的なる銀價の下落そのものは之に伴ふ所の貿易商品價格の騰貴を、銀貨國に於て發生せしむべきが故に、それは金本位國と銀本位國との間の貿易の消長に根本的に影響を及ぼすものではない。此點より見るときは銀價の下落に就て餘りに恐怖的事であることは禁物である。蓋し銀價の低落が相當長期に亘つて存続するときは、支那に於ける物價の騰貴が一般的となるであらふ。次に支那に於ける一般物價の騰貴は自然、通貨としての銀の需要を大ならしめ、それはやがて上海に於ける銀資金の對外價值をして大ならしめ銀爲替の相場を騰貴せしめ惹いて銀塊相場を騰貴せしむるの結果となるであらふ。是に於てか、若し世界諸國にして銀價問題をして自然の解決に委すの辛棒を有するならば、私は銀價問題は支那(並に印度)の物價騰貴が自ら之を解決するに至るものと考へる。(完)

社會主義經濟に於ける 經濟的計慮の問題（上）

校友 山本勝市

氏は本學推薦校友にして現に和歌山高等商業學校教授として「經濟原論」の講座を擔當せられてある新進篤學の經濟學者である。

一、序 言

資本主義組織の崩壊とそれに續く社會主義組織の到來が、一の必然性を以て實現せられねばならぬものであり、そはたゞ時期の問題に過ぎないのだ、といふ考へは、今日我國に於ける社會主義者は勿論、一般智識階級の常識と斷定して差支ないであらう。だが余は斯くの如き考へを以て、眼前の事象の皮相なる觀察から得た常識に止るものと信する一人である。

資本主義組織が、將來諸種の點で其の形態を變化すべきは想像に難くない。然しながら資本主義組織が今日そのまゝの形態を維持し得ないといふ事は、決して社會主義組織が實現するといふことゝ表裏をなすものではない。それはある者が死ぬといふ事實と、彼れが死後極樂（或は地獄）に生れるといふ事實とが同じことでない程に、明に異なることである。更に資本主義組織が今日そのまゝの形態を維持し得ないことが明であつても、資本主義が本質的根本的に變革されると斷定する譯にも行かぬ。本質に變化なくして而も形態のみ變化するといふことがあり得るからである。

今本論文の目的とする所は、社會主義の到來を信する所の常識に對して、一の科學的批判をなさんとするにある。素より全面的に取扱ふことは小文のよくせざる所であるから、たゞ社會主義經濟では、經濟的計算に基く生産が不能であるといふこと、換言すれば、社會主義生産は出鱈目生産に陥入らざるを得ないといふことを明にすることによつて、社會主義が主張する所の社會、即ち

第一、生産手段を社會（國家）の手に歸し、國家が中央から國民の欲望に應じて意識的計畫的に生産分配を行ふこと。

第二、消費物選擇の自由、並に勞働選擇の自由を各人に許すことの到底實現し得ざる一の幻想にすぎぬことを立證しやうとするのである。右第一の原則は第二の原則と相反するものであつて、同時に實現することは不可能な所以を論證するのである。

なほ右二個の原則を以て社會主義の構成要素としたのは、マルクスの所謂「ゴータ綱領批判」によるのであるが、併し今日我國社會主義者は勿論、世界の社會主義者が、共產主義と區別して社會主義といふ場合に、考へて居るそれに相當する。

二、經濟的計慮の必要——如何なる經濟組織の下に於ても資本は需要に比して稀少なるものであり、従つて新資本の使用は常に經濟的に行はるゝことを要する。

今假りに、需要せらるゝすべての資本財が、需要せらるゝだけの量を任意に生産され得るものとすれば、資本の使用は任意たることを得る。換言すれば、その際「最少の犠牲を以つて最大の効果を得る」といふ所謂經濟的計慮は無用といふべきであらう。然るに若し、資本の量が常に限定せられて居り、その需要に比して稀少なるものとすれば、資本の使用は任意たることを得ず、必らずや、能ふ限り、少い資本で經濟的效果の最大なる消費財の生産を期せねばならぬ。従つて社會主義經濟の下に於て、經濟的計慮が必要なるや否やを決するためには、社會主義社會に於て、資本が其の需要に比して稀少なりや否やを明にすることを必要とし、又それを明にするを以て充分とする。

一切の生産物は材料と勞働との所産なるが故に、皮相の見解よりすれば、材料を提供しうべき自然の資源と、且つこれを開拓加工しうべき勞働の存する以上、すべての資本財はこれを任意に生産し得るものと考へるかも知れぬ。然しながら、資本財の生産のために充當し得べき材料と勞働とは常にある範圍内に限られたものであつて、決して任意たり得ない。なんとすれば、今新に資本財の生産のために、材料と勞働とを振向けんとするならば、それだけの材料と勞働とは、必然に消費財の生産から拔去らねばならぬ。換言すれば、その際可能なる消費を制限する以外の方法を以て新に資本を増加することは絶対に不可能といはねばならぬ。

勿論一度消費を犠牲として生産せられたる資本は、次の階段に於ては消費財の一層の増加となつてあらはるゝものである。資本が需要せられ又資本の増加が生産力の増加と同一視せられうるのは其のためである。併しながら、消費財の増加は後になつて初めてあらはるゝものであつて差當つては、可能なる欲望充足を犠牲とするの外はない。即ち將來に於けるヨリ大なる欲望充足のために、現在に於て可能なる欲望の充足が犠牲とされるのである。もつと平たういへば、欲望の充足を待つのである。然るに、その欲望充足を待ち堪へるといふことが、如何なる社會秩序の下に於ても、常にある程度以上には實現され得るものではない。

欲望充足を待つことが常にある程度以上に實現し得ないものだといふことを理解するためには、論證を俟つ迄もなく、何人も自ら及び自らの周圍を凝視すれば充分であらう。何人と雖も、貯蓄が自己及び其の家族の將來の幸福を増進するといふ理窟を知らぬものはない。而も何人と雖も、其の所得のうちの極めて僅少な部分より貯蓄し得ないのであり、毫厘も貯蓄し得ざる人も亦決して尠くはない。人の欲望は生活慣習につれて限りなく増進するからである。

個人經濟について見る右の事實は社會主義經濟の下に於ても變化あるべき理由はない。國民の欲望充足を目標とする社會主義經濟の中央機關は、國民の將來に於ける欲望のヨリ大なる充足を考慮する前に、先づ以て現在の欲望を充足せしむることを考へねばならぬ。

社會主義經濟の下に於ける資本の形成は、今日の如く個人によつて行はるゝものではなく、國家の中央機關自らの手に行はるべきは論を俟たぬ。さて結果が自らの私的利益と直接の關係ある私人にとつてすら極め

て困難とする所の貯蓄が、自らの私的利益とは何等直接の關係なき國家（の役人）の手によつて盛に行はれ得べしと考ふることは、甚しき國家力の過信であり、人性に對する無知を表明するものでなければならぬ。勿論善良なる官吏の意思を問題とするならば、現在の消費を制限して資本を蓄積することが、將來の國民の福祉を増進する所以を疑はないに違ひない。だが問題は意思にあるのではなくて、其の意思の實行にある。大多數の民衆は、將來のために現在の消費制限を犠牲とすることを甘受すべしとは考へ得ない。而も大多數の國民の要求に従ふべき社會主義經濟の當局は、又其の聲に従はずんば其の地位を保持し得ないであらう。

役人に公費を節約する能力の微弱なることは、現に資本主義諸國家の官吏の實證せる所であるが、彼の勞農ロシアが、斯くも大なる天然資源と勞働とを有しながら、何にもまして資本の缺乏を訴へ、所謂「特許政策」によつて外國資本の流入を乞はねばならぬ事實は、經濟組織の如何にかゝはらず、資本の増加は常にある限度を越え得ないといふ私見に對する一の證左となし得るであらう。

右の如く資本の供給は限定されて居るけれども、資本の需要は限りなきものである。其の生産的効果の故に、農業といはず工業といはず資本使用の可能性は無制限である。生産手段の斷えざる進歩が資本の實際的使用を要求せしむるのみならず、他方欲望は其の種類に於て制限なく増大する性質を有するがために、新資本が需要を見出し得ない状態、即ち資本が需要を充足して十分なりといふが如き状態は、永遠に到達し得ざるものと見なければならぬ。

以上述ぶるが如くにして、社會主義經濟の下に於ても、資本の限られ

たる供給と限られざる需要との前に、自由に處分し得べき新資本は常に稀少を告げざるを得ぬのであり、従つてこの稀少なる資本をば、あくなき需要の間に分割して如何なる財をどれだけつくるか？を決定するに當つては、其の結果が最少の犠牲を以て最大の効果を收め得る様に、所謂經濟的計慮をなさざるを得ないと斷ぜねばならぬ。然らば斯くの如き必要なる經濟的計慮が社會主義經濟の下に果して可能であらうか？

三、社會主義經濟の下に經濟的計慮の可能なるためには、先づ第一に各消費財に對する欲望の強さを比較し得なければならぬ。然るに需要供給によつて動く所の價格制度を排除せるマルクス社會主義經濟の下では、それが不可能である。

稀少なる資本を以て何をどれだけ生産すべきかを決するに當つては先づ第一に、それ／＼の財の生産に對する國民の欲望の強さを知り得なければならぬ。同一量の資本を以て甲財の量をもつくり得るが、乙財の量をもつくり得る。而して甲財の量よりも乙財の量の方がヨリ強く要求せられ居るに不拘、あやまつて先づ甲財をつくるならば、それは經濟的生產ではなくて非經濟的生產である。今日の社會に於ては斯くの如き欲望の比較的要求度は、不完全ながらも、市場の價格を通して間接に表示される。たとへばある一定量の資本を以て百圓の生産物をもつくり得るが、又百二十圓の他の生産物をも造り得るとせば、後者がヨリ要求せられて居る一の證左であり、従つて先づ後者の生産増加に資本を用ふることが經濟的生產といふことになる。勿論分配の不平等なるがために購買力を

伴はざる欲望は價格の上にあらはれて來ないけれども、少くとも購買力を伴ふ限りの需要の變化は直ちに價格の變化としてあらはれ、經濟的生産の指標たる役目を果す。即ちある財に對する欲望が減退すれば價格は下り、反對に欲望が増加すれば價格が上がるが故に、各生産者はこれと生産費との比較をなすことによつて（この點は後に述べる）欲望に應じた生産を行ふことが出来るのである。勿論生産が欲望に適合するためには時間を必要とし、従つて時に兩者の背離を免れぬけれども、併し常にこの適合に向つて生産が調節せらるゝことは疑へない。

然るに需要供給の適合によつて定まる價格を排除せんとする社會主義經濟の下に於て、何が現に價格が果しつゝある役目を果し得るか。即ち社會主義の中央機關は何によつて欲望の程度を比較することが出来るかと思ふに、直接的統計調査に據ると答へるの外はないであらう。然れども統計は其の本質上過去の消費量を知り得るけれども、到底變化する將來の欲望を知るを得ない。亦全く新たな財に對する欲望については何物をも教ゆるを得ない。又如何に綿密なる調査も到底不斷に變化する需要を教へ得るものではない。（此の點については拙著、「マルクシズムを中心として」中に詳説した）

斯様に需要供給によつて定まる價格制度を否定するマルクス社會主義經濟は、欲望の比較的要度を知るがために間接的指標を失ひ、結局直接統計調査に訴ふるの外はないが、到底實際上其の目的を達することが出来るないのである。そこである種の社會主義者達は、欲望の直接調査の實行の困難を認め、従つて需要供給によつて變化する價格制度を維持し、而して其の價格を以て需要測定 of 指標たる役目を、今日同様に、果さし

めやうと試みた。即ち其の主張によれば、一切の資本を所有する國家は勞働者に對しては勞働券を用ひて其の働に應じて報酬を支拂ひ、其の報酬の範圍内に於て各人に消費財選擇の自由を認める。そこ迄はマルクスの組織と代りがない。たゞ勞働券によつて消費財選擇の自由を認むる必然の結果として、供給と需要とに過不足を免れぬが、過剰の場合は下げて、不足の場合は上げて賣ることによつて需要供給の一致をはかることとする。すればその價格は、供給と需要とによつて定まるのであるからその動きを見て欲望の動きを知る間接的指標たるべしと主張するのである。斯かる組織は一見巧妙ではあるが、實は絶対に存在し得ざる一の幻想にすぎぬ。理由は項を改めて述べるであらう。

四、勞働報酬の支拂に勞働券を用ひつゝ、而も價格を需要供給によつて定めんとする企は、全く一の幻想に過ぎぬ。

勞働報酬を支拂ふに勞働券を以てし、且つ其の所有する勞働券の範圍内に於て各自に消費物選擇の自由を認め、而も消費財の價格をば需要供給の變化に應じて變化せしむるが如き價格制度が何故に一の幻想に止るか、これを一言にして云へば、斯くの如き組織の下に於ける勞働券は絶対に價值計算の尺度たるを得ず、従つて交換の手段たる用をなさぬといふ理由による。詳言すれば次の如くである。

凡そ今日迄のすべての社會に於て價值計算の尺度たる貨幣は金又は銀といふが如き具體的な一個の商品であるか、又は兌換券の如き金銀等の一定量と交換し得べきものであるが、然らざれば、不換紙幣の如き、商

品貨幣と同時に存在して而もそれと同一名稱を有するものであつた。即ち直接にか間接にか、一定量の物的商品に對する支配力が認められたものであつた。今問題とせる社會主義經濟の下に發行せらるゝ所の勞働券は、金銀の如き物的商品としての價值を有するものではない。又兌換券の如く、一定量の物的商品と交換を約束せられたものでもない。更に不換紙幣の如く、物的商品貨幣と同一名稱を以てそれと同時に通用を約束されたものでもない。それは全く物的基礎を缺くが故に、其の支配力の大きさを捕捉すべからざる所の一個の純觀念的、抽象的な存在にすぎない。等しく勞働報酬を支拂ふに勞働券を用ふるとしても、その勞働券を以つて引換へ得べき商品が豫め確定して居るならば、換言すれば消費財の價格が一定不變に確定せられ、需要供給によつて變動することなき場合に於ては、其の價值は物的商品に基いて捕捉され得る。従つてその場合の勞働者が價值計算の尺度たる作用をなすことは必らずしも不可能といふを得ない。たゞこゝに問題とする社會主義經濟に於ては、價格が需要供給で變化する上に、勞働券そのものが何等素材價值を持たぬ紙片であるといふ事情により、全く捕捉すべからざる一の抽象的存在と化するのである。直接にも間接にも、幾程の物的商品を支配するかゞ豫め確定せざるが如き單位は、無意味な數にすぎぬと考へるのである。此の點については、恐らく貨幣價值の本質に關して如何なる説をとる者の間にも異議はあるまいと信ずる。

以上の如くにして、價格を需要供給の關係によつて動かす所の組織の下では、勞働券は價值計算の尺度單位たる用をなし得ず、従つてさうした制度は、最初から單なる一個の幻思に止まると考へる。そこで次の如

き考が起り得る。即ち今日の如く、それ自身に價值を有する金屬(商品)貨幣を用ひつゝ、而も價格を需要供給の一致點に定むる様な制度を採用すれば、そこに成立する所の價格は欲望の強さを示す指標として、今日の價格同様の機能を果し得ずや、といふ考である。私は以下、かゝる制度に於ける價格も亦、欲望の指標たる役目を果し得ざる所以を明にするであらう。(未完)

學 報 歌 壇

校 友 小 林 間 喜 太

嬉しもを嬉しむにさきだつは哀れさびしさの思ひなるかな
ごもするご故郷のことを忘れたりするそんな自分になつて了つた
迷信ご只に云ひ切りなになく云つた自分がいやにさびしい
こころにいさかひしたくなつてくる腹立しさがあはれでもある
去つて行く人は追ふまい少しでも残る人だけ残つて貰つて

近 郊 雜 感 校 友 榎 卯 三 郎

野を越えてかすかに揺らぐ町の灯に白き路みゆ冬の夕暮
姫松の紅き入日に野を越えて牛車三輛ならびて行くも

堺 に て

思はずも足をこゝめて酒造る唄聴きにけり霜白き夜に
酒造る町に來ぬれば亡き伯父の若かりし日を思ひ出づるも
巨大なる桶道に見ゆ酒造る町の霜夜の寒き人影
灯火のあかき夜なれど新春の寒き街路は人疎なり
冬の夜町歩み居ればそゝろにも妻子戀しき思ひの湧くも

バック現象學的經濟學序論 (完結)

在大學院 藤本進治 譯

3 純粹經濟學の課題としての經濟の存在性規定

實際純粹經濟學があるところの地位は、外見そう見える程困難で漠然たるものではない。たゞ單に外見の假相だけが純粹經濟學に抗言するのみである。

傳統的純粹經濟學を「現實體より遊離せるもの」として特徴づけ、且これを排斥すべき、ひとはその際、一體いつより出發するのであるか？ 經濟の現實態より出發するのであらうか？ 一見そうである。が實際に於いては、あるがまゝに於ける全現實態よりひとは出發するのではなく、むしろ現實態の、何らかの一面的、皮相的な傳統的把握より出發する。實際、純粹經濟學がそれ自らの方向を、かゝる誤れる見解に従つて、定めたが故にのみ、それは邪路に入りこんで了つてゐる。經濟の現實態についての傳統的見解は、傳統的純粹經濟學の形式と同じく、今日に於いては、すっかり動搖してゐる。傳統的純粹經濟學の形式の基礎的前提、すなはち、傳統的な現實態把握が、われわれにとつて、なんらの妥當性を、もはやもたないといふ正にその理由を以てして、傳統的純粹經濟學の形式は結局もはや思惟し得られないといふ譯ではない。

傳統的國民經濟學は單に經濟の事實的、現實的、現實態 *die faktisch-reale Wirklichkeit* を識るのみだ。それは經濟の存在性、現實態 *die ontische Wirklichkeit* を識りはしない。しかも、このものを、まさに純粹經濟學の對象として考察に入りきたるものである。經濟の存在性現實態は、それが現實態として可能であるべきかぎり、かつ亦可能的なものとして體驗さるゝことの可能なるべきかぎり、それこそ經濟に本質必然的に屬さねばならぬ當的存在性 *Sein* である。經濟の存

在的存在性 *das ontische Sein* は經濟—現實態としての—の可能性のみに關聯し且事實的經濟現象—可能的なものとしての—の全體的な不規則的充實 *die ganze unbestimmte Fülle* を包むところの、一般的存在性である。すべての現實體は單に合法則的體制としてのみ可能であり、またかゝるものとしてのみ體驗されうるのでから、經濟の存在性存在性はひとつの合法的體制を示してゐる。經濟の存在性現實態については普通妥當的立言が可能である。

もしひが現實的經濟を事實的—現實的—なものとしてではなく、可能的なものとして考察し經濟の可能性の諸前提を、諸規定が如何なるものであるかを目あてにして經濟的現實態を研究してゆきさえするならば、經濟の存在性存在性は現實的經濟に則して觀察されるべきである。實際、ひとつの存在の現實性はその可能性のもつともよき表示であるから、現實的經濟の存在論的考察 *die ontologische Betrachtung* はつねに必らずなしとげうるはづのものである。それ故、あらゆる現實的存在者 *wirlich Seiende* はつねにその事實的—現實的存在性、をよびその可能的存在性をめあてにして研究されう。現實存在 *Wirklichkeit* の概念がすでにそのことを、それみづからのうちに包含してゐる。存在的研究においては變位された *Ingeweihter* 又は想像的な *phantastischer* 可能性の分析が問題なのではなくて、現實的な精密に把握しうる規定的を表示する現實的諸可能性の分析が問題なのである。

傳統的國民經濟學の行ふ觀察は、よしそれが「現實的」經濟について云々しやうとも、結局は事實的、現實的な、經驗的に確定しうべき經濟過程の諸規定をめあてにしてきた。それ故、經濟の存在性存在性はひとつの現實的存在性としては傳統的國民經濟學から覆はれてゐねばならなかつた。傳統的國民經濟學は經濟諸事象の感性的多様性に固執してゐる。しかし、經濟の存在性存在性その本質構造 *ihre Wesenstruktur* その根源 *ihre Ursprung* その始源根據 *ihre Ugrund* その合法則性及び必然性はひが經濟的事象を非感性的、可能的存在體制 *Seinsordnung* の

して、範疇的直観に於いて、把握するとき、始めて把握される。

かくして、傳統國民經濟學は、それが經驗的獨斷論に臣事してゐた故に、經濟の存在的存在性に耳をかさなかつた。しかも傳統的國民經濟學も、經濟の存在的存在性、その本質、必然性、合法則性等に關する諸疑問及び諸問題を同様にさけることはできぬ。その故は、なんらか事實的諸現象の認識可能な規定はひとがその本質的特性 ihre Wesenseigenschaft その固有の必然性及び法則性を識つたときのみ可能となるからである。かくて傳統的國民經濟學は經濟の存在的存在性を事實的現實性に於いて把握し得ない故、それは必然的に既知の法則觀念及び必然性觀念 Gesetz- und Notwendigkeitsvorstellungen に従つて、經濟を分析せねばならなかつた。しかし、かくの如きものとしては自然科學を發展さしてきたものゝみが當然問題になつただけであつた。故に國民經濟學に於ける自然科學的思維方法の支配の原因をわれわれは經濟の存在的存在性が現實態科學の研究對象として認識されず、またみなされなかつたといふ點にまで廻りもこめねばならぬ。國民經濟學に於いて、經濟が自然科學的諸範疇——ひとをそれを不可避免的に普遍的範疇とみなしてきた——に従つてよりほかには全く科學的に規定され解明され得ぬといふ意見が起りえたのも、やはり同様の事情に原因をもこめねばならぬ。自然科學に於いてとは異りながら、なほ合法則性概念及び必然性概念を把握しうるこいふ思想は全く起つてこなかつた。それ故、現實的經濟諸事象が自然科學的範疇によつては十全に in adäquater Weise 規定されないことを經驗が示したとき、ひとはこの範疇をすてないで、經濟が優勢な——自然科學的——思維圖式 Denkschema に適應するやうに經濟を變位したのである。この處置を形式的に正當と證明しうるために、ひとは經濟的事象の法則性及び必然性についての純粹に經濟的な諸教説を理念にまつり上げた。それらに従つて經驗的—事實的事象を秩序づけ得んが爲に、それを恣意的構成の形式に於いて解釋した。しかも、かくの如き諸構成には何等の現實的妥當性も附與されてゐない。かくて、純粹經濟學はその對象、す

なほは經濟の存在的存在性が現實的存在として考察されず、認識されなかつた故に、その變位された客體や、任意的、虛構的な、かつ現實態より遊離せる形式を生みだした。

さて、しかし經濟の存在的存在性を現實態として否認することは、全く不可能である。もしこれを是認せず、しかも論理的矛盾を犯さざらんことを欲するならば、ひとは經濟的事象、しかもまさしく事實的事象のなんらかの認識を拋棄せざるを得ない。經濟的事實的存在は、それが何らか存在の ontische なものに關係づけられないかぎり認識可能な必然的體制も、內的合法則性もなく諸現象の混沌たる狀態を示すのみである。傳統的國民經濟學も結局また「現實的」wirkliche 經濟事象をかくの如く—すなはち、ひとつの混沌—考へた。(註、經濟の存在性についての傳統的國民經濟學のこの基礎觀念はその認識論に於いて、すでに明らかに表現されてゐる。わたしたちはこの研究に於いて、適當な場所ではその問題にたちかへるであらう)とは云へ、事實的經濟事象は混沌としてでは認識の可能的對象でない。事實的經濟事象になんらかの虛構的合法則性 eine fiktive Gesetzmässigkeit を與へることも、それは傳統的國民經濟學が幾分は考へたやうに混沌を對象としやうとしてゐるものでない。

傳統的國民經濟學によつて、可能的經濟現象及び諸聯關は現實態のうちにはあり得ない。何者、可能的なもののは決して事實的なものとなることはないから。それ故、傳統的純粹經濟學は可能的經濟諸聯關を單に觀念的構成としてのみ考へうるにすぎぬ。事實的經濟はつねに私たちが規則的に把握しうる、なんらかの純然たる所與—たとへば自然—を表現するものでなく、その存在性から云へば現實化された可能性であることすなはち可能性として私たちが理解しうる一つの意味を含んでゐるといふ事實、この事實を傳統的國民經濟學は考察しないでしまつた。ひとが經濟の存在的存在性を見するや否や、現實態科學が、空虚な幻想的な、すなはち觀念的に勝手に構成された可能性にではなく、現實的諸可能

性——確固たる（理念的）規定性と限界性をもち、唯單に一定の行爲形式に於いてのみ現實化され得、従つてまた嚴密に科學的研究の對象としうる諸可能性に純粹に事後的にたゞさはりうることは自明の理となる。明らかに經濟の現實態と事實的經濟事象を同一視するのは許されぬ。經濟の存在的存在性は事後的體系的に研究されうる現實的存在性である。經濟の本質必然的法則性を認識するために、經濟を可能性として把握すべき純粹經濟學を現實態科學として基礎づけやうとするのは、かくて全く期待なきことではない。それ故、いかにして、純粹經濟學の理念は現實化さるべきかの問題を、より一層満足に解決するため、今日いかなる方向に於いてその問題を追求すべきか、をたゞちに明らかにする範圍内に事實的純粹經濟學の認識局面を私たちは規定した。

國民經濟學があるところの位置は現實態より遊離せる純粹經濟學がすてられるのを望むものでなく、傳統的一面的現實態把握がよりひろくされ、深められるのを望む。經濟の現實的、合法則法及び必然性についての問題が提起さるべきである（註、傳統的國民經濟學に於いて、經濟に固有の合法則性一般についての問題を明確に提出せんごし、また敢て之を解明せんごした一人のひとはエフェル・オイレンブルグ、Fr. Eulenburgであつた。エフェル・オイレンブルグ、自然法則と社會法則。社會科學、社會政策論叢三十一冊、三十二冊參照）Vgl. Fr. Eulenburg, Naturgesetze und soziale Gesetze, Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik, 13d. 31. u. 32. 經濟の合法則性に關する國民經濟學の全て従来の議論は偏局的、素材的——自然科學的——法則概念より出發し、したがつて、經濟に於ける何等かの合法則性の否定、または經濟事象の自然科學的把握に到達する。前者の結果は後者のそれと同じく、國民經濟學的研究、ごく純粹經濟學にとつて、何の役にもたゞぬ）もし、ひとがそれに反對せんごせば、それごも國民經濟學はその研究の領域中に形而上學的問題をひき入れることになるだらう。したがつて、それには單にこれら諸問題の誤解だけでなく形而上學の誤解が根底に横はつてゐる。

傳統的現實態把握によつてのみ、この反對論は正當な論據をもつかのごとき外見を呈するかもしれないが……經濟の現實的、合法則性及び必然性は、よしそのごきなほ明らかに認識論的諸困難性が克服さるべきものごしても、端的なまた直觀的な仕方では、現實的經濟に於いてそれみづからを示さるべきものである。

純粹經濟學にたいする狐疑はその思维方法が經濟の存在性と一致するときのみ、あるひはまた經濟そのもの、存在性より（恐らくこれからは進んで、より精密に規定さるべき）純粹經濟學ごもいふべきもの、可能性がすらすらご明らかになるごきのみ、消滅するであらう純粹經濟學の基礎づけにごつては經濟に合法則性を附與するだけでは充分でない。純粹經濟學が事後的に基礎づけらるべきものごすれば、それは經濟に特有の合法則性を明らかにすべきだ。

認識はつねに何ものかの認識である。而して、認識の形式ご構成ごはつねにその客體の形式ご構成ごに適應せしめられねばならぬ。このごはまた純粹經濟學にごつても妥當する。純粹經濟學の基礎を規定することは、その對象を規定することごに他ならぬ。しかし、私たちの確認するごころに從へば、純粹經濟學の對象ごとしては經濟の存在的存在性のみが考察に入りきたりうのみである。純粹經濟學は恣意的構成や、基礎づけし得ざる虛構なくして、いかにきづきあげられうるか、そしてまた、それが認識によつて經濟の現實態が表示する體制を顯現することごに何を寄與するかは經濟の存在的存在性の分析よりしてのみ分明になりうる。私たちの課題はかくて與へられてゐる。

4 經濟の存在的存在性への通路

純粹經濟學のなんらかの基礎づけが克服すべき最初の困難性は經濟の存在的存在性が直接に把握さるべくもあらぬごいふ點より生れる。全然前提ぬきにしては國民經濟學は經濟に近づくごごができぬ。それに從つて、經濟が純粹經濟學の對象ごとして規定さるべきなんらかの諸觀點は國民經濟學的研究に先立つて與へられてゐるべきである。しかし非經濟的、存在領域の基礎づけによつて發展されてき

た諸範疇を、それが使用することは許されない。この困難性をこれまでの國民經濟學は全然克服しきつたことはない。これは國民經濟學の責任といふよりは寧ろ個別科學を嚮導することを理解しない、その時代の哲學の罪である。この點に於いて今日私たちはより幸福な位置にある。

近代哲學は存在論の新しい基礎づけによつて、不相應な思维様式から脱したのみならず、一面的な、すなはち自然科學的または歴史的諸範疇のうちに於いて事實上思惟すべき束縛から多くの個別諸科學（國民經濟のみならず）を脱せしめた。本質と事實。本質必然性と事實的必然性。本質的合法則法と事實的合法則性との區別、すなはち、すべての存在領域に例外なく意味に則して *singulents* 適用さるべき區別づけによつて（就中）個別的、制限的存在領域のみならず存在一般に意味に則して適用されうる存在範疇が見出された。そこでは普遍的思维形式が確立しており、而して同時にその領域にのみ適應する細目的規定は各々の個別諸科學に譲りまかすのである。

しかし、これをもつてしては純粹經濟學のなんらかの基礎づけをさまたげてゐる諸困難性のたゞ單に一部分のみを解決したにすぎぬ。經濟自體の存在性（本質）について哲學は本質的なものをなんら語らうともしないし、また語ることもできぬ。經濟の存在性に關する諸問題は國民經濟學的科學の内部に於いてのみ、正しく把握され、而して傳統的國民經濟學の研究と結びつき、またそれと論別しあふることによつてのみ一歩解決に近づけられうる。純粹經濟學の發展を通じて、直觀及び思维形式—それらは放棄され、更によりよきものを以つて更改されるか、あるひは改良され、より深めらるべきものである—のみが示されうる。このことによつて純粹經濟學への通路が實際自由なものとなる。經濟の存在的存在性が純粹經濟學の唯一の可能的對象として、それみづからを今日私たちにあらはにしてゐるのは決して偶然でない。また偶然な哲學的潮流と連關するものでもない。純粹經濟學の全發展（その皆教的なもの、及び變種をも包括的にいつて）は必然的

であつた。それ故、わたくしたちは今日經濟の存在的存在性を明白に把握しうる（註、經濟の存在的存在性が現實的存在性として把握されねばならず、従つて純粹經濟學の對象として考察のうちに入りきたるといふ、主張を方法的基礎よりしてのみ私たちは私たちの詳論の主眼目たらしめた。純粹經濟學への根源的道程に於いてそれは最後の認識を形づくつてきた。結局私たちはこの主張をこの序論で充分に基礎づけることはできぬ。私たちの研究の結論に於いて、はちめてこの主張の妥當性が全く明らかに會得されるものとなりうるであらう。）この事態關係は私たちの行動を決定する。私たちは純粹經濟學を特殊科學として基礎づけるために、近代國民經濟學の種々の研究から出發する。而してその際展開された諸々の根本直觀 *Grundanschauungen* の妥當性と効果範圍とを分明ならしめんことを求める。このことは所與の事情のもとに於いては傳統的純粹經濟學にてもつねに同じくその研究の眞の對象をなしてゐた經濟の存在的存在性を闡明するに最も容易な道程である。

傳統的純粹經濟學はそれだけで多數の異つた形式及び直觀様式をつくりあげたが、その多數は經濟の存在的存在性には十全なものでない。けれども忽卒な分析がすでに示せるごとく、外面的にあらはされた、すなはち明らかに主張されてゐる形式や直觀様式によし近似的であらうと、また矛盾してゐやうとも、唯一の可能的な形式と直觀様式とが、それぞれの純粹經濟學になんらかの形であらはれてきた。經濟の存在的存在性の一少片すらをも開示しなかつたやうな、従つてまた限定された度合に於いて妥當性と承認とを要求し得ない純粹經濟學の體系は一つもない。このことは假説的—恣意的形式が豫めせしむるより一層非常に高い程度で經濟の存在的存在性に事實適應してゐる近代純粹經濟學になによりもまず通用する。私たちの最初の課題はそれ故、傳統的純粹經濟學に於いて得られた諸見解を分明にし、可能ならば、それに合意味的形式 *singulente Form* を與へることである。かくて純粹經濟學のうちに私たちが到達した認識の地位を確定したとき

はちめて私たちは私たちの仕事のつぎにきたる部分に於いて、從來いまだ解決されぬ問題を解決により近づけ、全體として純粹經濟學を經濟の存在的存在性に對して、極めて有意義な關聯のうちに措定することを試みうる。

いふまでもなく、純粹經濟學を基礎づけやうとする、すべてこれまでなされた研究を詳細に分析することはできぬ。私たちはそれらの諸研究について徹底的な選擇を遂行せねばならぬ。まづ近代的國民經濟學に對してのみ、それら諸研究を制限すべきである。それは合目的根據よりしてのみでなく、寧ろ一層事態的根據よりしてそのせねばならぬ。近代的國民經濟學によつて純粹經濟學は國民經濟學の特殊の統一の教説として其後把握され、基礎づけすべく試みられる限りに於て其發展の一つの全く新しき研究段階に入つた。それ以來、純粹經濟學の基礎づけが解決すべき問題はやつこはちめて正當にあらはれてきた。純粹經濟學が依然として國民經濟學中に没入するかぎり、その特殊の客體 *ihre besonderes Objekt* 獨自の認識様式及び認識は認 *ihre eigentümliche Erkenntnisweise und Erkenntnisberechtigung* を分明ならしむべきなんらの機會もない。純粹經濟學が一つの特殊の教説として把握されて以來、ずつこ、ひとは經濟的事態關係(可能的な事態關係をもこめて)が示す本質的差別を分明にし、國民經濟學の構成の爲に、その本質的差別がいかなる結果をもたらすかを研討するといふ仕方で純粹經濟學を規定せざるを得なくなつてゐる。第一に經濟的事態關係の全體が統一的にひとつの特殊の教説によつて把握され、解明され得ぬこと、第二にかかる合法則的事態關係は普遍妥當的判斷をくだしうべき、統一的、結締的、解明、關、*einheitlichen, geschlossenen Erklärungszusammenhang* をそれみづからつくりあげるもの、このことが示された時にのみなんらか特殊の純粹經濟學の可能性と必然性が證明されてゐる。經濟的事態關係の組織 *Die Gliederung der wirtschaftlichen Sachverhalte* はそれが適應すべき目的に應じて、明確に基礎づけられた認識論的立場よりしてのみ着手されうる。經濟の變位によつて純粹經濟學に、なんらかの獨自的客體を與へ

やうとする探究にもこのことは通用する。かかる前提に適應しない純粹經濟學の基礎づけの試みをすべて私たちは私たちの考察からごきまでも除外せねばならぬ。彼らは偶然に正當であり得やうが、自己の判斷に對してなんらの支點をもそれみづから提供し得ない。とはいへ、私たちは一般的前提に適應する基礎づけの試みのなから、なほ徹底的な選擇をなさねばならぬ。その場合私たちが嚮導される觀點はつぎのごとくである。すなはち私たちは純粹經濟學のいづれの典型的様式に對しても、その重要な特質的な代表者をごきまでも把へてあなければならぬといふことである。

純粹經濟學を特殊の國民經濟學的教説として基礎づけることとする最初の大きな試みは、ツェー・メンゲル *C. Menger* によつて企てられた。ツェー・メンゲルの「社會科學特に政治經濟學の方法に關する諸研究」『*Untersuchungen über die Methode der Sozialwissenschaften und der politischen Ökonomie insbesondere*』(ライプツヒ、一八八三年。以下單に「研究」と省略す)は純粹經濟學についての統一的な見解を徹底的に表現したものは決していひ得ないが、それは、それ以後純粹經濟學によつて獨自的に發展されてきた諸見解を概念的に、あるひは少くも暗示的に包含してゐる。それ故、私たちはメンゲルの議論を詳細に顧慮せねばならぬ。

すでにメンゲルの諸研究にふくまれ且また國民經濟學のそれ以後の發展過程に於いて、それからについての統一的基础づけがなされてきた經濟の純粹經濟學的把握様式に私たちは心理學的「力學的」及び理學的の三様式を區別せねばならぬ。この各々の把握様式に對して私たちは、それぞれの典型的代表者に語らしめやう。心理學把握様式に對してはエミール・サックス *Emil Sax* 力學的様式に對してはヨゼフ・シュンペーター *Joseph Schumpeter* 理學的様式に對してはマックス・ウェーバー *Max Weber* である。純粹經濟學に於ける心理學的傾向、ならびに力學的傾向はごきにも正當な思想によつて支導されてゐる。しかし、たゞ合

理的經濟理論のみが事後的に、意味法則に従へる仕方である。in sachlich-singemäßer Weise。純粹經濟學として構成せられる。ひとり、これのみが經濟の存在的存在性として一致せしめられる。經濟的事象は本質必然的に理性的に性格をあらはにする。この、その經濟性程度はその合理性の程度に依存すること、したがって經濟の本質は合法則的、合理的、經濟的諸可能性 die gesetzmässigen rationalen wirtschaftlichen Möglichkeiten の嚴密な規定によつてのみ把握されうること、これらのことを經濟の存在的存在性の分析は示すであらう。

心理學的純粹經濟理論はまづ第一に體系的に完成すべきことを求められた。それによつてこの傾向が支導された正常な思想は次のごとくであつた。すなはち、經濟事象は結局つねに人間の意識過程に遡りうる、而して經濟は人間の生々實存的に聯關する wissenschaftliche mit dem menschlichen Leben zusammenhängend といふ考へ方であつた。この傾向がおかしてゐる過誤は、それが事實上なしとげてゐない心理學的形式をその學說に與へやうとしたところにあつた。實際、心理學的諸研究はかかる心理學的傾向によつて、少しも遂行されたことがない。心理學的傾向が新しき認識に到達したところはいつくに於いても經濟行為の合理性に關係してゐた。この心理學的傾向の支柱的思想をそれ故ひとは誤まれる心理學的色彩よりひき離して次のごとく形式化することができた。すなはち私たちは經濟的理性を私たちのその經濟的事物または過程のうちに求めるべきでなく、むしろ私たち自身のうちに求めねばならぬ。經濟の體制と合法則性を私たちは經濟者の適當な合法的思維及び行為にまで遡りも求めねばならぬ。この形式化に於いて合理的傾向は所謂心理學的經濟理論の支導的思想をわがものとすることができる。こはいへ、心理主義は純粹經濟學に於ては誤れるものである。

その心理學的立場の故に、たゞちにその限界に突きあたつた經濟理論に於ける「心理學的」傾向に續いて「力學的」傾向が自己を主張しやうとした。「力學的」傾向の支導的思想はつぎのごとくである。すなはち、私たちはあらゆる經濟のう

ちに長い間ずっと變らぬ經濟的機能聯關 ökonomische Funktionszusammenhänge を描定しうる。而して特に私たちの知るうちで最も發達した今日の經濟はある微妙に作用しつゝある價格調節 Preisregulierung をしめしてゐる。それ故ひとは比喩的は價格力學主義 Preismechanismus なる言葉をそれに與へることが出来る。「力學的」經濟理論によつて經濟的機能諸聯關は、はじめて意識的に科學的視野のうちに押ししめられた。しかし、純粹經濟學に於けるこの傾向は、それより一歩進んで、その主張に事實に則する形式 eine sachgemässe Form を與へやうと少しも試みなかつた。しかも、それは經濟事象を實現的に解明することを斷念し、純粹經濟學のうちに憶說的形式、恣意的構成や、基礎づけし得ざる虚構をうちたてるこいふ様なことをやつてしまつた。これに對して今日ではその研究は甚だ批判的になつてゐる。純粹經濟學に於けるこの傾向を、それが經濟の存在的存在性を明らかにしてゐる限りに於いて、それに向つて研究するならば、その諸構成は、それみづから稱してゐるよりも、且また傳統的現實感把握の立場から見えるよりも、ずつと恣意的性格を少くする結果になる。それがよし、いかなる場合にも、またいかなる仕方にも、なんら現實的力學主義と考へられ得ないにしても、その諸々の「虚構」ごともに、それは經濟の多くの合理的存在性を把握すること理解してゐた。

純粹經濟學を特殊の國民經濟學的教説として基礎づけるべく試みられたすでにその以後に於いて、國民經濟學のうちには二三の合理的傾向の根本思想が明らかになつてゐたにも拘らず、純粹經濟學に於ける合理的傾向は近代に於いて始めて主張せられた。すでにフイデイオクラート派の人たちは、すぐれて經濟的合理的本質的性格を識つてゐた。それはとくに彼らが經濟的事實的現實性を主としてその研究對象としたのみでなく、純粹な（理念的）經濟的諸可能性をもその研究對象とした點に結びついてゐた、ひが國民經濟學に於ける事實的現實的經濟諸事象の研究に自己を制限する度合に應じて、純粹經濟學のうちに自然主義と心

理主義が入りこんできた。この過程はすでにアダム・スミス、Adam Smithにはじまった。そしてそれ以来、國民經濟學に於いては、合理的經濟的諸可能性の研究がすっかり動搖してしまつて居り、一般に存在可能性としての經濟はもはや明らかに考察されてきてゐない。近代に於いてもまた、たゞ單に形式的方法論的合理主義が純粹經濟學のうちに行はれたが、それは經濟の存在的存在性には何の關係もないものであつた。これは本質的に現實態の傳統的表象と結びついておりしかも、かゝる現實態表象はこの結びつきを決して許すものでなかつた。しかし

本質研究への移りゆきとともに、ひとは純粹經濟學に於ける合理的傾向が普遍的實質的意義をもつことを認めたのである。
この前提的な概観にひきつゞいて私たちはこれから純粹經濟學の基礎づけのためになされた二三の典型的な試みに注意をむけやう。そしてその分拆と批判とを通じてこの教説への通路をより一層精密に開示しうるのであらう。私たちはメンガー的見解の敘述(解釋)と批判とを以て始める。これによつて私たちはたゞちに問題論の中心にみちひかれるであらう。(序論おはり)

新刊 紹介

League of Nations Ten Years
of World Co-operation, forward
by Sir Eric Drummond; 467
p. 8vo. 1930.

近時國際法學、國際政治學、國際文化事業等其他凡百の國際現象の研究をなさんとするには國際聯盟に關する研究を疎外するを得ない。従つて是が出版物は汗牛充棟も尋常ならぬ有様である。而して是等出版物を大略するに事實の記述に止まるものと理論的研究を進めんとしたるものになすを得べしと雖も、其何れに就いて見るも國際聯盟の局外者又は個人的地位に於いてものされたものであつた。

茲に冒頭したる本書は、國際聯盟常設事務局にあつて、常に國際聯盟の事務を直接耳目にし、口にし、手にする其職員諸君が、過去十年間の事實を正確に正直に記録せられた一大合同力作に外ならない。此故に單なる記録や想像の練接に基づく私研究書等とは其信憑力に於いて到底同日の感ではない。事務總長ドラモン

ド氏の序文によれば、本書は「史」の名を濫稱するを得ない、公文書と言ひ得ざるは勿論亦史實の材料ともなし得ざるものであることは雖も、各章下に於いて規約條文總會決議其他必要なる概念の解説を試み、或は既往に發生したる事實問題毎に相當詳細なる記述を試み一見以て容易に聯盟各事業の内容を明白ならしめたる點は、唯謙讓の辭たるに過ぎないと思信する。

氏は聯盟の公表出版物のみが史料として信頼し得べきものと指摘してゐるが、國際聯盟の公表出版物は頗る多様多岐に遡り過去十年間即ち一九二九年度迄の出版物に關するカタログのみを繰るも實に二四〇頁の大きさに達してゐる。此故に權威あり信頼し得べき國際聯盟に關する概括的な著述の要求は多年國際關係の研究に意を用ふるものゝ渴望する所であつた。其希望が聯盟十年を期として漸く實現したのである。

今本書の内容をみるに、先づ事務總長ドラモンド氏の序文を以て頭首を飾り、次に緒言に入り、直ちに章を分ちて、紛争の平和的處理、平和機關と軍縮、國際

司法裁判、國際法の成典事業、財政と經濟的協力、國際交通通過、保健、社會及人道問題、智的協力、委任統治制度、少數民族の保護、ザール河流域及ダンチツヒ自由市、聯盟の財務行政、聯盟と輿論の十四ヶ章を以て本文となし、附するに國際聯盟規約全文、簡易なる出版物表、聯盟圖書室備付の國際聯盟に關する重要著書の註釋附目錄及び總索引を以てし、著すに英佛兩語版を採つてゐる。

敢て言ふ。國際聯盟は靜的に非ず、常に動的にして國際現象に應じたる活動を現實に行ふ。故に國際法學に志す者たるは、國際政治學に志す者たるは、國際經濟學に志す者たるは、將又國際社會學に志す者たるは問はず、等しく研究をなすべきや勿論、實にセミナーに於ける研究對照たるに止まらず、廣く實社會に於いて研究をなすべきものである。今本書を得、殊に此種書籍の寂寞を感じる我國に於いて江湖に推薦せんとする所以である。(R・K)

學 內 報

卒業式豫告

大學學部第七回卒業式は本月二十日午後二時より千里山學舎講堂において、専門部第四十三回卒業式並に附屬關西甲種商業學校第十六回、同第二商業學校第六回卒業式は同日午前十時より天六學舎講堂において何れも舉行の筈である。

校友總會並に校友懇親會 開催豫告

例年の如く校友總會並に校友懇親會は本月二十日(卒業式當日)午後五時より大阪中央公會堂において開催することに決定した。

校 醫 囑 託

今般左記の如く本學校醫を囑託した。

耳鼻咽喉科

大阪市北區堂ビル二階

醫學博士 井 利

アブシ 眞 氏

内 科

大阪市西區南堀江通四丁目

醫學博士 西 業

求 氏

外 科

大阪市南區三休橋南詰

醫學博士 藤 森 舜 吉 氏

學 內 消 息

新町徳之教授——賜暇を得て三月十五日から四月十五日まで約一ヶ月の豫定で北支那(直隸、河南、山東)見學のため旅行する。東道の主人は本學出身で北平滞在の嶋久四郎氏(永谷操一教授の知友)で旅館は北平東單牌樓扶桑館。

動 靜

住所移動

村上九郎氏(専門部生徒監)左記に轉居

京都市上京區出雲路内河原町四三

柚木 馨氏(講師)左記に轉居

神戸市六甲篠原目柳七二〇

樹下重次郎氏の訃——關西法律學校當時講師として盡

瘞されたる休職大審院判事樹下重次郎氏は東京市外西大久保の自邸にて病臥靜養中のごころ、二月二十二日遂に逝去された。享年七十五。

校 友 彙 報

九大千里山會懇親會

齋藤、宮本兩先生の御來學を期として、去る一月廿

八日午後四時、第二學生集會所に於て、久し振りの會合が行はれた。そして此の懇親會は兩先生の歡迎會として開かれたものであるが、同時に昨春入學させた山崎、平岡兩君の歡迎會でもあり、又此の三月、三ヶ年の星霜を経て、愈々箱崎の學園を巣立つ諸君の前途を祝福する爲の送別會でもあつた。

先づ法文學部玄關前にて記念撮影をして後懇親會に移つたのであるが、その前に齋藤先生は、御用事の爲我々一同を特に私室に呼ばれて御懇篤なる激勵の御言葉を置いて歸られたのは、我々に取つて實に名残り惜しく思はれた。だが、懇親會には宮本先生、佐治先生の御列席を得、集まれる會員八名、先づ司會者の挨拶後、母校を中心としての話題に花が咲き、次で宮本、佐治兩先生のお話があり、會員は自己紹介を兼ねて、それ〴〵所感を述べる所あり、午後八時、和やかな空氣を會場に漂はせながら、乾杯をして一同は別れた。當日の出席者左の如し。(下、H報)

(〇印三月に卒業すべき人)

齋藤先生、宮本先生、佐治先生

○李東九、○矢能巖、○八田薰、霜村盛郷、今井長二郎、松本茂、平岡憲太郎、山崎兩三郎の諸君。

動 靜

津崎 常治氏(大八 専法 警部、大阪府東消防署よ

り堺署へ。

一法師安喜氏（大九 専法）警部補、大阪府中津署より高津署へ。



九大千山里會親會記念撮影

中川八百八氏（大九 専法）警部補、大阪府島之内署より警察部刑事課へ。

田部 一喜氏（大九 専法）警部補、大阪府天満署より警察練習所へ。

安藤 勘一氏（大九 専法）警部補、大阪府戎署より島之内署へ。

河野 悦敷氏（大九 専法）警部補、大阪府警察部特高課より島之内署へ。

天宅 俊治氏（大九 専法）警部補、大阪府住吉署より警察部調停課へ。

米良貫一郎氏（昭二 専法）警部、大阪府川口署より今宮署へ。

川内平三郎氏（昭四 専文）二月四日、西田藤吉氏長女藤子嬢と華燭の典を挙げられた、新住所は堺市車之町東三丁二

移動

小笠原語咲（昭三六 法）豊能郡豊中町吉野通一丁目

下櫛 紹隆（大九 専法）北區道本町一

柏木 留吉（大九 専法）兵庫縣武庫郡御影町字掛田

名倉 熊藏（大九 専商）西成區新町通二丁目二

佐藤芳太郎（大九 専商）東京府下西葉町池袋四九

平野 宿彌（大九 専法）港區八幡屋雲井町二丁目二

渡邊 榮（昭三 専法）靜岡縣賀茂郡下賀茂温泉

磯田賢二郎（昭三 専文）中河内郡布施町荒川一九五

奥澤 澄（昭五 専商）三島郡吹田町榮町一八六

伊藤柳穂方

改姓名

（舊）

昭三 専文 柳川 兵藏

（新） 藤井 兵藏

逝去

昭和五年十二月十日逝去

明治二十九年關西法律學校出身

勝井 喜藏

昭和六年二月十九日逝去

明治三十一年關西法律學校出身

日笠 秀一

昭和六年二月十日逝去

大正十二年專門部法律學科出身

大正十五年法文學部法律學科出身

野村 滋藏

（遺族）泉南郡尾崎村四一五、兄野村久吉

昭和六年二月十日逝去

昭和三年專門部文學科出身

三品 金行

（遺族）兵庫縣永上郡上久下村、父三品惠松

學生彙報

皇陵崇敬會

第二次第廿九回例會——昭和六年度最初の例會として、又本年度卒業生諸兄の卒業記念例會として去る一月十日大鐵沿線藤井寺方面に舉行す。當日は殊の外寒さ厳しく風雪の日であつたが、卒業生を三人交つた一行は固き信念と意氣を以て雪中を巡拜一時半無事阿部野にて散會す。

當日の參加者左の如し

溝邊文和、奥川武郎、山下昶、岩田定一郎、田畑誠之助

送別會——昭和維新の聲を聞くことは久し

い。然乍國民を率ゆるの大先達なく眞に國家を思ふ純情の國士出でず、國民は不安焦燥の霧圍氣に陥入つて社會上にも精神上にも全くその重壓に堪へ難くなつた氣持がグン／＼と燎原の火の如くに燃え始め、將に久しき沈黙を破つて日本國に育まれ來た日本人としての本來の心に立ち還らんとする姿が九千萬同胞の心奥に動き始めたのが昭和六年初當の狀態である。國を擧げて青年の奮起を望むこの際、創立を八年の昔に遡る祖國を思ふの情切なる心的結合の一團である我が、皇陵崇敬會は本年六人の前途有望の青年を怒濤天に冲す

るが如き實社會に送り出すことになり、四十年来の記録持參の全國的に襲來した物凄い酷寒の夜——一月十日に日本橋みつわたに於て送別會を開いた。劈頭多年の功勞を謝し、尙後輩の鞭撻と社會的活躍とを切望し



皇陵崇敬會第二次第十三回例會記念撮影

最後に國內的に一大革新を斷行すると共に國外的に一大雄飛を試み、世界的大使命を有する昭和維新の大事業に貢獻すべき意氣と經綸とを少くとも心底に藏して自己の本分に向つて邁進されたく、現在の不況は實に意氣ある青年にはこの上なき好試験であることを述べ

て饒げどした。諸先生竝に先輩諸氏も交々立つて激勵的送別の辭、或は初歩の實社會學を述べられ、之に對して卒業生は過去の追憶と將來への抱負を述べられ、送る者送らるゝ者が打ち寛いで大いにメートルを揚げたことは言はずもがな。——十時散會

當日出席者

卒業生——溝邊文和、奥川武郎、中村武一郎、淺見寛二、山下昶、清水安義の諸兄
小泉、河村、若松、田所、香坂、今西、島津の諸先生

川島、森井の兩先輩

丸山、岩田、田畑、平井の諸君

第二次第卅回例會——昭和六年一月廿四日(土曜日)放課後勝尾寺開成皇子の御墓に詣り、一行は千里山より寒風の中を佐井寺、和田、奥等の村々を経て約五里勝尾寺に着く、番僧の好意の湯にて一息し、守部殿に仰へられて、更に躊躇たる急峻を攀る事六町、御墓は木棚をほごした質素な五輪塔で後方には御修行を遊ばした座禪石や風雨をしのがれた岩窟等の御遺蹟ありて一同當時を偲ぶ。

こゝに皇子の御事蹟の大略を記しておきます。

開成皇子ハ光仁天皇ノ皇子ニシテ、桓武天皇ノ庶兄ニ當ラセラレ、長スルニ及ヒ聰慧ニシテ佛典ヲ諳誦シ、天平神護元年實齡四十餘才ニシテ潜力ニ攝津藤



昭和六年六月十六日學友會委員長及各部主將にヤザ

尾寺山ニ登リテ出家シ御法名ヲ開成ト稱ヒ給ヒテ、桂洞ニ住セラレ、僧ノ善仲善算ニ師事セラレシカ其後桂樹ヲ伐リテ草堂ヲ稱ヘラル御父帝之レヲ聞キテ攝津豐島郡ノ稻一ノ千束ヲ賜ヒテ其費ニ充テシメ給フ寺ノ名ヲ彌勒寺ト賜フ尋テ寶龜六年復タ島下郡水田六十町ヲ御贈アリ天應九年十月薨ズ、寶壽五十八。延暦元年十月桓武帝勅シテ皇子ノタメニ法華八講ヲ

修メラレ以テ恒例トス、清和天皇モ復タ且テ御眼ヲ患ヒ給ヒ御平癒ヲ祈ラレンガタメ當山ニ行啓マシマシテ御親書勅額ヲ賜リ寺稱ヲ勝尾寺ト改メ給フ、後年光明天皇モ復當山ニ臨ミ住ミマシ給ヒ遂ニ此ノ山ニ於テ崩御マシマセリ。(皇陵五號ヨリ)
暮近き頃箕面に向つて下山す、眞暗な山中を長々歩み箕面驛にて解散す、一行の一部は歸路北賢治君のお宅で非常なる御歡待に預るこゝに厚く御禮申上げます。

尙當日の參加者は左の如し

香坂先生、武藤先生、藤本武之助、寺嶋正信、大橋喜朔、土山行照、染谷正之、長尾榮一、田畑誠之助

福岡縣人會秋季總會

昭和五年十一月二十九日午後六時半、北新地弘得社に於て千里山及天六學舎との福岡縣人會の意義ある合併福岡縣人會發會式を兼ね、第一回秋季總會を開催す來會者十六名、開會に當り會則の件に就き決議をなし次いで總會に移り關西大學並に縣人會の萬歳を三唱し、學歌を合唱しつゝ和氣韻々裡に散會せり、時に十時半。

猶發會式後一同の記念撮影をなす。

因に出席者は左の通り

猪本秀生、洞信夫、鳥巢隆三、大坪忠馬、谷口宗

明治二十三年 創業 預金 貳億壹千餘圓 大阪貯蓄銀行 株式會社

本店 大阪東區伏見町
支店 東京市外四十五個所

行發回一月毎『貯大』報行

フ乞ヲ讀愛御リア付備ニ店支本紙輯編ノ位本味興他其句俳柳川

入耶、多久正紀、村上敏丸、内田昌生、桑原義隆
山口美義、江口松彰、櫻木一雄、安藤羊三、佐野
正雄、城戸壽彦、平井三朗、

巴里追懷

(承前)

中村良之助

カルチエラタン——大學の年中行事

試験——東風に梅薫り、やがては桃花千里、世は春だのに、先生は探點に、學生は受験に、何時になつても試験はつらい。何處へ行つても試験の辛さに變りはない。カルチエラタン——パリフランスでも學生と先生に試験はつきもので、日本なら差づめ「無邪氣なる」小學生といふ階級にも年に數度のコンクール(競走試験)が行はれてゐる、中學、高等、大學等では勿論の事激烈なる試験があり、入學、卒業、資格、昇級何れも試験だ、實習、演習、研究、指導等と名稱こそ變つてゐるが皆試験其物で謂はゞ、余りに試験に慣らされてゐるのである、積極的な研究態度が試験にこだわらぬので問題は制度の運用に存するのである。學園に行われる試験は學生生活の特徴づける劃期的行事である。だから、試験といふ機會に複雑多岐なる大學組織が整調せられ、數千の學生と教授の出入と分科の課程が秩序づけられて、大學組成員としての自覺を印象づけられるのである。

式典其外の事——自由の國フランスといつたつて誤解しては困る。古典を尊ぶ事は我國以上だ。諸式萬般、

意外に壯重に行はれる。卒業、資格、稱號、學位、記念等皆學式に依る。之等は試験と共に、學園内の人々の結縁の機となるのである。講演會も毎日毎夜の如く催さ



(景夜のドルコンコ) 薩藤のーエジリエンヤレはるゆ見にか遙

れる。學園の教室、講堂はこれに利用せられて大學園の雰囲気醸す一助となるのである。前號に記した大講堂に満ちる參會者の空氣に接する時は「ソルボンヌ

學風の核心は此人々、此敬虔の態度に在りと首肯せしめられる。私は異國人として、流暢なる佛語、豊富な學識に接する度に、今更の様だが、「歐洲留學」この感銘を新しくし、研學の氣をそゝられたのであつた。

次に愉快なのは教授の就任に際して挨拶の形式でなされる演説である。これは全學生、全教授が參會して相識る機會でこれによつて教授と學生の學園の生活は初まるのである。

音樂會——單に聽者であるといふ以外に私には嘗て母校に其音樂部創設に當つた過去を偲ばしめるもので一層懐しい會合であつた。凡そ此處に在る學生は過去において必ずや數年の音樂的教養を得てゐやう。否、樂部バリを環境とする彼等の音樂への理解は記する迄もない。それは技術の巧拙を尋ねて、音樂効果を主觀的に價值批判するのでなく寧ろ此空間藝術を通じて彼等の「級友」に對する精神的連鎖を深め學生時代を謳歌するのである。所謂演者を自己と見做して音樂界に學生の音律の世界を伴はふてゐるのである。

舞踏會——舞踏に對する社會的觀念と前提が全然違つたパリでの話だか宛に角、一月から三月迄土曜を撰んで、各分科で舞踏會が催される。學生と其家族、教授家族等も參加してホールで踊るのである。勿論國際的會議や學會の時のその様な絢爛さはないが學生の純

眞さ、若やかさが發見される、惟ふに音楽と云ひ、舞踏と云ふも共に律動と整調の世界に生命表現の形式を齎るのである。そこには自由と秩序があり衆庶の公平な階調の存在が必然に伴はねばならぬ。學園の舞踏に何等の奇異と弊害の感ぜられぬのは全く「洗練」せられた人と社會とが斯くあらしめるのであると思へる

學期と學年

學年は一般に十月頃からはじまる。

秋の日足も短くなつて、宵の散歩に町の灯影が懐しくなる時分に、カルチエラタンの書店に Université de Paris (livret de Pétudiant) という書物が現はれる。堂々數百頁の學校案内だ。新進の意氣に満ちた學生は是に依つて自己の研究時間割を豫定するのである。十一月頃から學校と下宿圖書館、研究所等との規則正しい學生の往復生活が始まる。キリスト教國の彼等には十二月のノエルに少しの休暇はあるが學生によつて特色づけられるカルチエラタンの街頭觀に異常は來さな。noëlの贈物やjoyeuse année, nouvelle année. (新年)の賀詞もある。然しこれ等の特色は寧ろ社會人の間に盛である。親戚知人の機縁は斯様な事で結ばれ深められる。私もボアのマダムダビッドに招かれて母國を離れた人の淋しさを慰められた事を記憶してゐる。又 DE. Monanges という昔は貴族だつたといふ佛語

の先生の所で tire Roi という遊びやダンスや、又何とかいふ opéra Chantouse の歌謡に夜を更かし、遂に Monsieur Japonais として日本歌謡をせがまれたのに閉口し「最後の通辭」として「終列車におくれるから」と逃げんと試みたが此事で一層笑はれたスーブニールをもつてゐる。其處は巴里の北郊で、當夜の參會者の多くはパリからだつたが考へて見ると皆自動車持參であつたのだ。成程、パリはシトロエンの産地で、其夜は Chanson Japonaise に奇異の眼を睜らしめたのであつた。倍年次も改つて二月、三月、暖爐と燈光の内に教授も研究も進み、しめやかな内に、研學の活動は高潮する。陽光に恵まれぬ冬、寒氣と凋落の自然に、誘惑なく、籠居勉學するにふさわしい環境であり時期である。私は今も夜間の講義に時々當時を思ひ出す事がある。講演や、音樂會等、學舍を中心とする會合は此期に多く行はれる。

かくて、パーク (Paque) の小休暇が来る、世は春にめぐり合ひ學生は野外にはなたれる。地理科の學生は數日のエキスカリションに出かける。スポーツがはじまる。野球に代つてフットボール、特にラグビーが歡迎せられて甲子園へ押しかける日本と同じくボア・ツ・コロソへゴパリジアンは通ふ、愛撫するラケットを取出して男女は文字通りローンにテニスを楽しむ、カ

フェーが町並のテラスへ進出し話題の花にカフェーの香が漂ふ。青天井の下、並木の影を走る行路の車や人を眺めての夕食、カルチエラタンのカフェーとレストランは一齊に賑はふ。ごまれ

Quand à Noël on voit les monstres,
Quand à Pâques on voit les glayons

四月はカルチエラタンでも日本と同様、春興酣といふ所、五六月と學生は、眞に喜戯として、勉學に運動にいそむ。登校と散策の交響樂に急がしく暮らす。かくして夏のグラッド、バカンスに漸やく漕ぎつけ

る。學年のフィナルとして、海へ、山へ、故郷へゴパリの停車場は彼等によつて繁榮する、久しぶりて佛語から解放される留學生は早や同郷の學生と故國語で、バカンスのプログラムや彼等待つ種々の事を語り合ふ。此情景には郷國の餘りに遠いユーラシアの極東なる事に、時ならずも深い郷愁を感ずるのである。

稍遅れてパリジアンもパリを離れる。Bon souvenir だの De nice..... à Paris だのと給葉書は田舎からパリへ送られ、バカンス氣分を高ぶらせる。全くパリジアンは平素から節儉只管此事あるを豫定し猶も杓子も夏には出かける。それが九月頃からの話題になり一年の記念となる。但し彼等は海へ行つてもデヤブくごやらないのだ、海水服か一つの伊達着で、山ごいつても一般人はそう、跋渉する譯じやない。唯鬱積

したパリの人工都市から山野の自然の懷に入るののである。

カルチエラタンもパリも斯くして淋れる。然し淋しくはならぬ。他國の赤毛布と外來客、特にメリケンの人々がパリーツを持つてパリの流行を仕入れに來る。何ご不思議だ、パリジアン^{Parisien}の留守に。

街を散歩する事

日本食の味は醬油に特徴づけられ、パリ生活の味は街の散歩によつて變る。街路添景としてのパリの民衆は實によい調和である、雜踏して益々愉快になる。古來から民衆自治に慣れた秩序、大陸民の寛容と親切な態度は其施設と俟つて感嘆の外ない。Champs-Élyséesを以てパリ街の繁華と模範とするが、全く文字通り天國の樂園である。大小、地區を問はず、何處を歩いても心よい都會の散策が味へる。悠々歩一步を大地にしめて直行する者、漫步、漫談にくつろぐ人、紫煙に行人の影を覗ひ、陳列窓に好奇をそゝる人、緩急機宜、全く要領を得てゐる。

散歩の途、よく交通巡查が、ボツ然と人道に立つたり行人に道を教へてゐるのを散見するが、肩怒らして人民を怒罵する我交通巡查と大分な差ではないか。成程私は近頃、大阪で交通整理に、所謂「ヒツカカル」が、其

都度一體「人間都市人は」どこを行く」かとの疑問を久しうする。立札はあるが傍交又點を横つたらどこを歩くのやら。諸君、泥をはねられ、警笛とハンドルの亂用に驚かされ、僅其上に、「五十錢どうだ」がなかつたらどんなに自由で愉快だらう。又、人が永久に人道を辿つてfrom door to doorが出来たら。人車の併走、荷物の積卸、電柱、掲示板、看板、廣告。そして尙塵煙と撒水が大阪の街からないと考へ給へ。緑の大樹街を縫ふて行路の往還が如何に楽しいものになるか、それが人間、文化人の居住聚落じやなからうか。

スピードアップもよからうがウツレーとかのバスの乗客はトラック並、貨物の如くつめこみつめこまれてゐる大阪 Société de transport en Commun de la Région Parisienneの違法もない長い會社のバス（バス）や電車で、悠々喫煙し乍ら街情視察と出かけられるパリ。醬油味付の街の散歩、日本食とフランス料理程に違ふ。それがパリの街散歩の味だ。

喫茶と料理—學生でも一般市人でも、此處では間借が多いから従つてキャッフェとレストランが繁昌する、カルチエラタンの顧客は學生で安價が呼物となる。支那料理は値、味、質量に於いて東洋人は勿論佛人のグーにも合ふが、獨り日本料理はカルチエラタンに淋しい存在をつとけてゐる。テキ飯にソースをアツかける洋食がパリに發見出來ぬと同様に、喫茶店にも

洋の東西位の地理的相違以上に、全く天地の差があるかつて敦賀上陸の節に、新聞班と警察の人から、此相違を聞かれたが、全く返答に窮し、「コーヒー」ご「キャフエー」の差でせうご皮肉くつた事だつた。フランスパンごキャフエーを立喰ひ、オールドウアルごパンを注文し譯けられるご佛語も大分馴れに入る。カルチエラタンの安料理も平氣になる。短い留學に日本食と日本人に戀々としてはラタンの生活も意義をなさない。

ラタンは各國の留學生が滞在し、是等の人々ごレストランやキャッフェで相識する事が多い。顔の黄色い私でも昔の高い私、が食卓を向ひ合した時に、メキシコアルセンチン、フィリピン等ご大和民族たらざる種類に眺められた事もまゝある。同文同種ごは言へシノア（支那人）ご誤認せられる事は恐らく外遊日本人に共通する不快である。島國根性の然らしむる所なら詮ないが全々無理からぬ誤認だから虚心で相手になる事が肝要だ。此處はパリでコスモラマ、佛語を介して居乍らに各國人に接するのが得策、私は或時はチリ人から雑誌を買つた。又安南の鑛山科學生に印度支那の鑛業地圖を贈られた事がある。かく單純に語り、識り合ふのもカルチエラタンなればこれで全く愛すべき學生氣質の流露である。

（未完）

高田保馬博士「價格勢力說」

經濟學部

佐伯三郎

價格の勢力による説明、即ち價格勢力說と價値の免償による説明、即ち免償價値說とは高田保馬博士の經濟學理論に於ける重要な根本概念である。兩學說は提唱されて以來、數星霜を経て、今や經濟學上一新原理として聲望翹々たるものがある。

博士の經濟學は最近の著書「經濟學新講」の第一卷總說生産の理論、昭和四年十一月刊、第二卷價格の理論、昭和五年六月刊、及第三卷貨幣の理論、昭和五年十月刊によつて世に問はれた。そのうち、わたくしは主として第一卷及第二卷によつて、兩學說に於ける根本的部分を把握し一文にまごめる機會を得た。以下はその概要の報告である、或は誤つて博士の學名を傷けむことをおそる次第である。

目次

- (一) はしがき
- (二) 免償價値說
- (三) 生産物の價格
- (四) 生産財の價格

(五) 價格を決定する勢力

(六) 勢力の作用限界

(七) 結論

(一) はしがき

價値、價格論の發展に於て、大要生産費價値說と限界効用價値說とをあげることが出来る。前者は價値が生産費によつて定まることを説明せんとし、後者は價値が限界効用によつて定まることを説明せんとするにある。この兩學說によつて學ぶ可き多くの重要な點がある、けれども生産費說は解き難き循環的説明に陥り限界効用學說は生産財の價格決定の説明に當つて、救ひ難き弱點を有する。

又、生産費價値說と云ひ限界効用價値說と云ひ、價値と云ふ問題にのみ捉はれること多くして、それ等が解決べき價格については充分な説明を與へる所がなかつた。それは價格を現象形態とし價値をその潜在的なる姿であるとし價格論に先行して價値を研究すべしとする觀念からである。乍而、それに對抗して今や經濟學理論上の重要問題はこの誤る觀念の排撃にある。云ふところは即ち獨立なる價格論を樹立し、價値論をきりすて、直接に價格論を解決すべしとなすものである。

この間にあつて、古き生産學說に新しき衣をまごはしむることによつて價格理論を修正し、同時に限界効

用學說のすてる可き部分をすて、長き間經濟學上に於て華々しき論戰にも不拘、解き難き謎とされた價格の理論を社會的勢力によりて解明せんとする一學說を見落すことが出来ない。従つて問題は價格決定理論に於て、生産費價値說に於て、又は限界効用價値說に於て説明し難き部分が、價格勢力說によつて如何に説明せられるかにある。説明の順序は先づその序曲である免償價値說を先にし次に價格の勢力說に及ぼう。

(一) 免償價値說

從來の價値學說に於て、生産費價値說に於ては價値を決定するものは、一財に投ぜられた費用 (Cost) によつてあるとされ、限界効用價値說に於ては一財の價値はその限界効用 (Grenznutzen) に於て定まることとされた。高田博士に於ては價格を決定する價値は社會的免償價値であること云はれる。云ふ所は、價格を決定する所の價値は免償價値 (Spawert) にして、限界効用 (Grenznutzen) 又は使用價値 (Value in Use) ではない。各個人が交換に於て一財について見積る免償價値の動反動の作用によりて、一の社會的、客觀的なる關係が生ずる。この關係は勿論、それ自體は一つの勢力關係であるが、財そのものの側から見れば、一財Aの免れさせる代償の大小は他財Bに等しと云ふことになる。免償價値 (Spawert) とは何を意味するか、それは一財例へばAを所有する時には、Aを所有することによ

りて免れる又Aを所有することによりて他財を獲得する代償を免れさせる重要さを云ふのである。此の重要さを名付けて免償価値、費用を省かせる価値 (Ton-Kosten-Befreiungswert) と云ふ。Sparwert即ち費用を省かせる価値を云ふのである。

以上は簡單ではあるが、生産せられたる生産財(生産物)の価値の説明である。更に終局生産財(土地、労働)の価値については免償価値を考へることは出来ない。それは生産せられざるものであるから何等の必要なる費用もない。本来財はその免償価値が、少く共その供給者について見る限り、生産のために要する費用によりて定まることを見る可きであるが、終局生産財はそれを考へることが不可能である、結局それは免償価値の零なるものであること云はねばならぬ。

高田博士の免償価値は以上の如くである。そは大體「經植學新講」第一卷第二章に收むるものである。乍而云はるゝ免償価値は已に Adam Smith の富國論に於て説かれてある所であり、且つ免償価値は代償を免れさせる価値である、代償を費用 (Cost) と見る時は費用を省き得る価値であつて、生産費価値説の生産費概念に投げ入れられるものである。従つて新しい存在価値あるものではない。又免償価値が價格論の基礎付けと云ふ意味に於ても、それは間接的である。要するに經濟學に於て價值論は不可避であること云ふ觀念から價值を説き

従つてその決定と云ふ問題に於て免償価値 (Sparwert) なる概念を導入したものであること云ひ得るが、その價值についても疑ひの餘地があることは否定し難い所である。特に經濟學の根本的樞軸である價格理論に於ては、これをすてゝもつと根本的に流れるより大きな一つの線を他に求めねばならぬ。次に勢力説による生産物の價格が如何にして決定されるかを見るであらう。

(三) 生産物の價格

博士に於ては、財を別ちて生産物(完成財)と生産財(未完成財)に分たれる。最高次の生産財は土地と労働であつて最終生産財と云はれる。それは生産せられることはない、本原的に有する財である點に特性を持つものである。之等の財の價格がいかに決定せらるゝかを見るに當つて先づ生産物の價格が決定される過程を見、次に生産財の價格が決定される過程を研究しよう

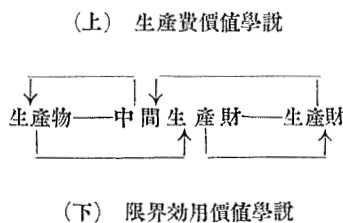
生産物の價格は從來の學說の如く、即ち

(一) 生産物の價格は、一財の限界効用によつて定まることはない。限界効用學說によれば、生産物の價格を決定するものは、一財に認める限界効用にあることとする。即ち生産物は直接に人格的欲望を充足せしむることによりて固有的に價值を有し、生産財は間接に、即ち生産物への生産を通して欲望を充足せしむることによりて派生的に生産物の價值からの反射によりて價值を有することとなるが後になつて示すごとくそれは疑

ふ可からざる矛盾である。

(二) 生産物の價格は、一財に費されたる生産財の價格によつて支配されること云ふことは否定し難い所である。即ち生産費價值説によれば、生産物の價格は、それが生産されるに當つて要した費用の價格によつて決定されることとする。この學說を貫いて生産費を労働であるとし、労働をその生産費即ち生活資料の價格の支配によつて説明せんとする時は、果てしなき循環的説明に陥つて正しく價格論を根本的に説明することは不可能である。

今之等の兩學說によつて價格が決定される過程を簡単に圖によつて示せば次の如くである。



之を要するに、生産物の價格、即ち最終生産財以外の生産財は凡て生産物であるが、その價格は、需要供給の關係よりして定まる、即ち詳しく云へば需要は効用の遞減の姿によりて、供給は生産費の關係によりて

その兩曲線の交叉するところに於て定まる。これが長期の考察に於ては、價格はすべて需要を充たすに足るだけの供給に應ずる生産費に於て定まると云はれ得る譯である。こゝに價格に關する生産費原則 (Preis-*Kostenprinzip*) の支配がある。乍而この際、一の根本的な前提を設けてゐる。それは生産財の價格が已に一定してゐること云ふことである。價格理論を根本的ならしむるためには、この前提を取り去らねばならぬ。而して、生産物たる生産財 (いはゆる中間生産財) の價格が生産費によりて決定せられる以上、最終生産財の價格は如何にして決定せられるか云ふ問題を明にしなければならぬ。

(四) 生産財の價格

こゝで、最も重要なものは生産財の價格である。生産物の價格については前述の如くである。いはゆる中間生産財は生産物であるから、生産物の價格が決定される道ゆきと同じである。而るに、最終生産財は生産せられざる財であるから従つて、その價格を決定するに費用の概念を導入することは出来ない。而らばそれは如何にして決定されるのであるか。

最終生産財として考へられるものに土地の地用と勞働がある。先づ、土地の用役の價格について考へるにそれは生産によりて供給されるものでないから生産費によつて決定することを見ることは出来ぬ。従つて、その價

格、即ち地代のみが生産費以外のものによつて定まるものと見られ、多くは單なる差益 (differential gain) によつて決定されるものと認められる。この差益は生産費以外のもの、即ち本原的に地主の有する社會的勞力によりて決せられると考へられる。

次に、勞働の價格、即ち勞銀について考へる。勞働の報酬、即ち勞賃が勞働の生産費、即ち勞働者の生活資料の價格によつて説明せられようと思ひられたが、勞働は生産せられるものではない、又勞働者の生活資料である衣服その他の消耗品はそれ自體のために行はれるものであり、勞働すること否に關係することではない。それは生命そのものゝ維持に自ら相伴へることである。

勞働の價格が、生産費によつて決定しないことが明らかとなれば、何によつて定まるとするか。それは本原的に生産費以外のものによりて決定せられてあらねばならぬ。今それを決定するものが社會的勞力であるとする、即ち勞働の供給に際して、その需要者の上に作用せしめる勞力の大きさ、云ひかふれば、各々の有する勞力關係に於ける地位の差異に應じて、各種の勞働の供給者の勞働の價格 (Price of Labour) が決定せられるのである。

種々の生産財、即ち諸々の生産手段は本來異質的なものである、之を一つの單位に抽象することは許され

ない所である。例へば勞働を意味する場合に於て、凡ての異質的な勞働を、一種類に還元して、その價格を一律に定めることは出来ない。それ等の價格は夫々の有する社會的地位に應じて要求し得る、勞力によりて決定するものと見なければならぬ。

最終生産財である土地と勞働の價格が、それ等の生産費を考へることが出来ないから、各々が本原的に有する社會的地位に應じて決定されることを述べた。この基礎に立つて、生産物の價格が需要供給の關係、従つて長期に於ては需要を充たすに足る丈の生産費によつて決定されねばならぬ。それらの、生産財の價格が社會的勞力によつて定まり、従つてそれより反映し來る經濟的勞力によりて決定されるが故に、生産物の價格に於ける變動は、一般均衡に落ち付くまで修正される。この變動から修正が行はれる作用、従つて均衡を得るまで作用し得る可能は勞力説の持つ強みである。

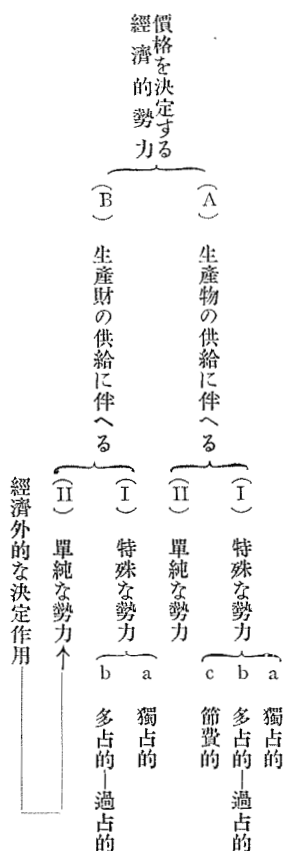
(五) 價格を決定する勞力

價格を決定する勞力 (Macht) とは何であるか。之に對して博士は次の如く説明される。經濟的勞力は、一財の提供によりて交換の相手から何物かを獲得し得る能力である。それは常に、財の提供に伴ふ力であること云ふ點に於て、他の社會的勞力と異なる。經濟的勞力に對立する社會的勞力は財の提供によらずして相手の意志を動かす能力である。經濟的勞力はその強さに従ひ

て左の如く分類することが出来る。この場合に於て最終の經濟外的な決定作用が、最も重要な地位を占め

てゐると云ひ得る。

次に、費用を要せざる最終生産財の價格を決定する經濟的勢力について考ふるに、生産物のみについて云ひ得る「單純な所有者（何等かの特殊的地位に立たざる供給者）の獲得しうるところの費用の大きさによりて決定せられる」と云ふ價格決定原則は當てはまらない。何となれば前述の如く、最終生産財は生産せられない所の財であるから、従つて當然、費用を考へることが出来ないからである。従つて、その價格は費用以外の要素によらなければならない。それは非經濟的要素である。即ち、經濟外的勢力關係に於て、夫々の供給者の持つ社會的地位によつて決定される外はない。今労働の價格（Price of labour）即ち勞資（Wages）を決定する要素を見るに、非經濟的關係に於て、労働の供



給者の本原的に有する社會的勢力が反射する所の經濟的勢力によつて定まるのである。

(六) 勢力の作用限界

更に進みて、價格形成に於ける社會的勢力の作用する範圍を考察するに、經濟的勢力の特性が、財の提供によりて需要者の上に及ぼし得る作用の可能性である。之に對立する經濟外的勢力、即ち本來の意味に於ける社會的勢力は、財の提供需要によりてではなく、それから離れたる所の「行使せられる社會的作用可能」であつて、價格を形成する勢力と區別せられる。前者は財（Good）に關係する點に特性を有し、後者は財以外の一般的作用可能である點に特性を有つ。前者の説明は已に明にせる所である、後者につきては、之を二種類に區別して考へることが出来る。（一）は組織せられたる社會的勢力であり、（二）は未だ組織せられざる社會的勢力である。

次に、問題とせられる經濟的勢力、並に經濟外的勢力にして、價格形成に於て、決定作用を有する社會的勢力が、價格の形成する過程に於て、果してゐる夫々の役割について見るに、生産物の價格に對しては、前に掲げたる如き各種の勢力が作用して、その價格を決定し行くのである。即ち一般的に單純なる經濟的勢力が中心をなし、一般的價格が形成され、この基礎の上に特殊なる經濟的勢力の作用が働いて特殊の價格が成立され行く。

單純なる經濟的勢力の作用する一般的價格は費用の量によりて定まる、何によりて費用の量は定まるか、明らかに生産財の價格によりてある。されば生産財の價格は何によりて定まるか、それは根本的には、直接に單純なる經濟的勢力によりてあるが、間接には、即ち究極に於ては、經濟的勢力以外の力、云ひかふれば、非經濟的な社會的關係によりて生ずる勢力によりて働かされる。

勿論現實の社會にありては、最終生産財の價格は、提供者及需要者の双方の力の交錯によりて定められるが、一般的には經濟的關係、即ち經濟的勢力が働いてその上限と下限をかざるのである。かゝる見方に於ては、その上限をなすものは、收益（いはゆる限界生産力（Marginal productive power）であり、下限をなすものは最終生産財の供給者（すなはち労働者）が自らそれ

を以つて生産し得るだけの大きさである。而して、最終生産財の供給者の価格が定められる限界は、経済的勢力によつてそれ等が有する各々の地位であり、それは最終に於ては、経済外的の勢力によるのである。

(七) 結 論

以上説明せるは、簡單であるが價格勢力説 (Machttheorie des Preises) の概要である。その理論的構造を今一度要約して見よう。價格形成の過程について、その中心的な部分を考察する時には (従ひて、あまたの特殊なる地位、優越せる諸々の勢力を切り離して見る) 次のように云ふことが出来る。

生産物の價格は、それに要する費用によりて、云ひかへれば、生産財の價格によりて定まる。勿論、この際には、單純なる経済的勢力が充分に作用してゐるものとする。生産財の價格は、生産されないから生産費によつて説明することが出来ぬ。それはそれ以外の要素即ち経済外的なる社會的勢力によりて定まるものと考えへる。生産財の價格がかくして、本原的に定まることに、生産物の價格は成立する。生産物の需要供給關係による一般均衡の理論 (theory of equilibrium) はこの基礎を得て定められる。以上は、勿論靜的狀態に於ける場合である、故にこの靜態からの逸脱價格が單純ならざる経済的勢力によりて説明せられ得る。

以上概略であるが高田保馬博士の「經濟學新講」第

一卷、第二卷の中心的部分であるところの免償價值説と、價格勢力説の概要を知つた。勿論、博士の聲名を傷けたることなきかをおそる次第である。而し、その理論の第一義的な部分はこのを以つて終つた積りである。次の仕事はその上に肉を盛り衣服をまごはしむることである。特に生産物價格に於ける需要供給の關係並に一般均衡理論 (theory of equilibrium) は果す可き最も大きなものであらう。

要するに、免償價值説は前にも云へる如く、切りすてなければならぬ殘された底荷である。價格は勢力説第二卷序文に云はれる如く「古き生産費説に新しい衣服をまごはしむることによりて、之をこりあげてゐる」それは、生産財の價格の説明に於て、生産費説の循環的説明を救つて、有名な Alfred Marshall の言葉「鉄の兩方のいづれの刃が紙を切つたか？」と云ふ未知數に屬する相互決定の一面をいとも明らかに説き得てゐる。乍而、それは價格勢力説の強みにして且つ弱みではないか、この興味はかゝつて時の問題にある。

(一九三〇、一〇、三日)

因みに、高田保馬博士の「經濟學新講」の第三卷、貨幣の理論は昭和五年十月、岩波書店發行、定價三圓。第四卷、分配の理論、第五卷變動の理論も同書店から近く刊行の運びになつてゐると豫告されてゐます。

◆特長 空氣清澄

◆修業年限 五ヶ年

◆市内 教育理想境

◆募集人員 一五〇名

上級各若干名

淀の水高等女學校 生徒募集

◆市電 春日出車庫下車 (北港新橋ヲ渡リ北へ二丁)

◆大阪市此花區淀川河畔 (電土四一一番)

◆特長 學費僅少

◆修業年限 高卒二ヶ年

◆上級學校入學希望者ハ淀の水高等女學校

ニ連絡アリ

淀の水高等女學校附設

淀の水女學校商業科 生徒募集

◆各學年共 五〇名 無試験入學許可

◆願書提出 自二月十五日 至三月三十日

◆詳細入學案内書ヲ呈ス

- Dobson, A., Fanny Burney (Madame D'Arbly) 1904 993/352/ 4
 Lawless, E., Maria Edgeworth. 1904. 993/352/ 9
 Birrell, A., Andrew Marvell. 1905 993/352/ 21
 Gwynn, S., Thomas Moore. 1904 993/352/ 22
 Gosse, E., Jeremy Taylor. 1903... 993/352/ 30
 " - English Men of Letters. (Pocket Edition.)
 Courthope, W. J., Addison. 1919 993/320/ 1
 Church, R. W., Bacon. 1910 993/320/ 4
 Chesterton, G. K., Robert Browning. 1930. 993/320/ 7
 Froude, J. A., Bunyan. 1908 993/320/ 8
 Shairp, P., Burns. 1909 993/320/ 10
 Ward, A. W., Chaucer. 1923 993/320/ 13
 Smith, G., Cowper. 1904..... 993/320/ 15
 Masson, D., De Quincey. 1926 ... 993/320/ 17
 Saintsbury, G., Dryden. 1912..... 993/320/ 19
 Stephen, L., George Eliot. 1926... 993/320/ 20
 Black, W., Goldsmith. 1912 993/320/ 24
 Gosse, E., Gray. 1930 993/320/ 25
 Birrell, A., William Hazlitt 1926 993/320/ 27
 Stephen, L., Hobbes. 1928 993/320/ 28
 Huxley, P., Hume. 1902 993/320/ 29
 Stephen, L., Samuel Johnson. 1925 993/320/ 30
 Smith, G. G., Ben Johnson. 1926 993/320/ 31
 Colvin, S., London. 1909..... 993/320/ 34
 Fowler, T., Locke. 1909 993/320/ 35
 Morison, J. C., Macaulay. 1927 ... 993/320/ 36
 Pattison, M., Milton. 1929 993/320/ 37
 Benson, A. C., Walter Pater. 1926 993/320/ 39
 Symonds, J. A., Shelley. 1929 ... 993/320/ 45
 Dowden, E., Southey. 1909..... 993/320/ 48
 Church, R. W., Spenser. 1923..... 993/320/ 49
Oxford Editions of Standard Authors,
 The Poems of Robert Browning, 1833—1868.
 1928 993/353/ 6
 The Poetical Works of William Cowper.
 Ed. by H. S. Milford. 1926..... 993/353/ 14
 Poem of Charles Kingsley, 1848—1870.
 1913 993/353/ 33
 The Poetical Works of John Milton. Ed.
 by H. C. Beeching. 1929 993/353/ 39
 Newman, J. H., The Dream of Gerontius
 and other Poems. 1914 993/353/ 39
 The Complete Works of Shakespeare. Ed.
 by W. J. Craig. 1928..... 993/353/ 44
 The Complete Poetical Works of James
 Thomson. Ed. by J. L. Robertson. 1908.
 993/353/ 50
Schofield, W. H.— English Literature from the
 Norman Conquest to Chaucer. 1925.
 993/346/
Squire, J. C.— English Men of Letters. (New
 Series.)
 Bailey, J., Walt Whitman. 1926 ... 993/324/18

叢書

春秋社編 世界大思想全集

- 第九卷 ヴァン・デル・ヴェーデル、ゲーテ・詩
 と眞實、シラフ・素朴の文學と
 感傷の文學、昭5.....001/28/9
 第十六卷 フーリエ・社團の社會主義要綱
 プルードン・勞働階級の政治的
 能力、昭5.....001/28/16
 第十七卷 ゴッデウイン・政治的正義、昭5.....011/28/17
 第三十六卷 キエルケゴール・憂愁の哲理、
 ベルグソン・意識に直接與へら
 れたるもの、オーエン・社會に
 就いての新見解、昭5.....001/28/36
 第四十八卷 アインシュタイン・相對性理論、
 ブランク・エネルギー恒存の原
 理、物理學的展望、昭5.....001/28/48
 第五十一卷 佛典篇 昭5.....001/28/51

春秋社編 第二期、世界大思想全集

- 第九卷 キボン・羅馬衰亡史、(四) 昭5.....091/33/9

宗教、交通

大東出版社編 國譯一切經、本緣部入、

昭5.....182/1 /

住田正一編 海事史料叢書、第十五卷、

昭5.....182/23/15

文學

正岡子規著 子規全集

- 第十二卷 少年時代創作篇(二) 昭5.....41/3 /12
 第十六卷 書簡(二) 昭5.....241/3 /16
 第十七卷 評論、漢詩、日記、 昭5.....41/3 /17

新潮社編 第二期、世界文學全集

- 第四卷 スタンダール・赤と黒 昭5.....090/56/4
 第十二卷 ケツラアマン・トンネル外二篇 昭5.....30/56/12

寄贈圖書

朝鮮總督府 同府編、朝鮮總督府及所屬 官所主要刊行圖書目錄

昭5.....027/4 /

藤岡幸二氏 松風嘉定著、錢屋五兵 衛直傳

昭5.....206/9 /

同 同氏編、松風嘉定 昭5.....207/11 /

三十四銀行 同行編、小山健三傳 昭5.....207/10 /

西野雄治氏 同氏著、次の極東戦争 昭5.....331/4 /

商工大臣官房統計課 同課編、會社統計表

昭和四年 昭5.....401/14/4

同 同、第六次商工省統計表

昭和四年 昭5.....401/16/4

大阪市役所 同 所編、大阪市統計書

第二十八回昭和四年昭5.....404/15/28

同 同、支那貿易年報民國十

八年 昭5.....461/31/

篠崎嘉郎氏 同氏著、銀價の崩落と大

連に於ける物價券銀 昭5.....432/112/

大阪府立貿易館 同館編、大阪貿易彙纂

昭和四年 昭5.....461/38/4

内閣統計局 同局編、産業分類及職業

分類 昭5.....515/102/4

- Kartellen und Aussenseitern. 1927.
.....424/ 52/
Weiss, F. J.— Grundlagen der Volkswirtschafts-
politik in ihrer geschichtlichen Entwicklung.
1929 411/444/

COMMERCE.

- Burnham, A. C.**— Bulding your own Business.
1923 451/ 47/
Legaret, G.— Histoire de développement du
commerce depuis la chute de l'Empire Romain
jusqu'à nos jours. 1927 457/ 21 /
Matthews, F.— Commercial Commodities. 1921
.....458/ 9 /

SOCIOLOGY.

- Scheler, M.**— Der Genius des Krieges und der
Deutsche Krieg. 1917..... 501/127/
Ward, L. F.— The Psychic Factors of
Civilization. 1906501/128/
" — Pure Sociology: A Treatise on
the Origin and Spontaneous Development of
Society. 1925 501/125/

EDUCATION.

- Budde, G.**— Moderne Bildungsprobleme. 1921.
.....551/ 26 /
Sallwürk, E.— Die didaktischen Normalformen.
1920.....551/ 27 /
Simmel, G.— Schulpädagogik: Vorlesungen,
gehalten an der Universität Strassburg. 1922.
.....551/ 25 /

LITERATURE.

- Bonnefon, P.**— Montaigne et ses ami. La
Boétie—Charron—Mlle de Gournay.
Tome. 1. Montaigne (1533—71); La Boétie
(1530—65); Les Essais (1571—
80) 1898. 996/113/ 1
Tome. 2. Montaigne (1581—85); Montaigne
(1585—92); Pierre Charron (154-
1—1603); Melle de Gournay (15-
65—1645). 1998..... 996/113/ 2
Chamard, H.— Les origines de la poésie fran-
çaise de la Renaissance. 1920. 996/112/
Courthope, W. J.— A History of English Po-
etry,
Vol. 1. The Middle Ages: Influence of the
Roman Empire. The Encyclopaedic
Education of the Church. The Feudal
System. 1926. 993/355/ 1
Vol. 2. The Renaissance and the Reformation:
Influence of the Court and the
Universities. 1920.....993/355/ 2
Vol. 3. The Intellectual Conflict of the
Seventeenth Century: Decadent In-

- fluence of the Feudal Monarchy.
Growth of the National Genius.
1924 993/355/ 3
Vol. 4. Development and Decline of the
Poetic Drama: Influence of the Court
and the People. 1922
..... 993/355/ 4
Vol. 5. The Constitutional Compromise of
the Eighteenth Century: Effects of
the Classical Renaissance; Its Zenith
and Decline; The Early Romantic
Renaissance. 1925.....993/355/ 5
Vol. 6. The Romantic Movement in English
Poetry: Effects of the French Revo-
lution. 1926 993/355/ 6
Craig, W. J. & Case, R.H.— The Works of
Shakespeare,
Dowden, E., The Tragedy of Romeo and
Juliet. 1927 993/321/ 20
Pooler, C. K., Sonnets. 1918 993/321/ 39
Baildon, H. B., The Lamentable Tragedy
of Titus Andronicus. 1904 993/321/ 34
Luce, M., Twelfth Night or What You Will.
1929 993/321/ 36
Pooler, C. K., Shakespeare's Poems. 1927
.....993/321/ 38
Craik, H.— English Prose Selections with Cri-
tical Introductions by Various Writers and
General Introductions to Each Period,
Vol. 1. Fourteenth to Sixteenth Century.
1928 993/356/ 1
Vol. 2. The Sixteenth Century to the Resto-
ration. 1920 993/356/ 2
Vol. 3. The Seventeenth Century. 1922
..... 993/356/ 3
Vol. 4. The Eighteenth Century. 1920
..... 993/356/ 4
Vol. 5. The Nineteenth Century. 1923
..... 993/356/ 5
de Maar, H. G.— A History of Modern English
Romanticism,
Vol. 1. Elizabethan and Modern Romanti-
cism in the Eighteenth Century. 1924
..... 993/358/ 1
D'Exideuil, P.— The Human Pair in the Works
of Thomas Hardy: An Essay on the Sexual
Problem as treated in the Wessex Novels,
Tales and Poems. Tr. from the Fr. by F. W.
Crosce. 1929..... 993/357/
Kipling, R.— Rudyard Kipling's Verse, 1885—
1926. (Inclusive Ed.) 1930.....993/360/
Hardy, F. E.— The Later Years of Thomas
Hardy, 1892—1928. 1930 993/354/
Milford, H. S.— The Oxford Book of Regency
Verse, 1798—1839. 1928.....993/359/
Morley, J.— English Men of Letters. (Library
Edition.)

Hessen, J.— Augustinische und thomistische Erkenntnislehre: Eine Untersuchung über die Stellung des hl. Thomas von Aquin zur Augustinischen Erkenntnislehre. 1921
..... 107/ 14/

Kroner, R.— Die Selbstverwirklichung des Geistes: Prolegomena zur Kulturphilosophie. 1928 101/126/

Marck S.— Die Dialektik in der Philosophie der Gegenwart,

Halbbd. I. Antidialektischer Kritizismus; Neuhegelsche Dialektik: R. Kroners System der Kulturphilosophie; Existentielle Dialektik. 101/125/ I

Nelson L.— Kritik der praktischen Vernunft. (Vorlesungen über die Grundlagen der Ethik, I. Bd.) 1916 151/ 36/

Rothacker, E.— Logik und Systematik der Geisteswissenschaften. (Handbuch der Philosophie.) 107/ 13/

Smith, A.— The Theory of Moral Sentiments; or, An Essay towards an Analysis of the Principles by which Men Naturally Judge concerning the Conduct and Character, First of their Neighbours, and then of Themselves. 1812 157/ 14/

Stern, E.— Jugendpsychologie. (Jedermanns Bucherei, Abteilung: Erziehungswesen.) 1928 140/ 55/

Titchener, E. B.— Systematic Psychology: Prolegomena. 1929 140/ 56/

Wundt, M.— Geschichte der griechischen Ethik, Bd. 1. Die Entstehung der griechischen Ethik. 1908 152/ 5 / I
Bd. 2. Der Hellenismus. 1911. 152/ 5 / 2

HISTORY.

Burckhardt, J.— The Civilization of the Renaissance in Italy. Tr. from the 15th Ed. by S. G. C. Middlemore. 1929. 214/ 39/

Herre, P.— Quellenkunde zur Weltgeschichte. 1910 218/ 10/

POLITICS.

Sternberg, K.— Die politischen Theorien in ihrer geschichtlichen Entwicklung vom Altertum bis zur Gegenwart. 1922.

..... 307/ 4 /

LAW.

Elitzbacher, P.— Deutsches Handelsrecht. 1925.
..... 384-6/ 44/

Korn, A.— Handkommentar zum Handelsgesetzbuch, (ohne Seerecht.) 1929. 384-6/ 43/

Planiol, M. & Ripert, G.— Traité pratique de droit civil français; Tome. 13. 1930.
..... 385-5/ 16/13

Rosendorff, R.— Die Rechtliche Organization der Konzerne, nebst einem Anhang enthaltend Aktenstücke aus der Konzernpraxis sowie eine Tabelle über die im Jahr 1926 vorgenommenen Zusammenschlüsse. 1927.
..... 348-6/ 45/

Saunders, A.— Maritime Law. With a Supplement, On the Law of Shipping during War as modified, 1914-18, by S. D. Cole. 1920 382-6/ 14/

Sohm, R.— Institutionen: Geschichte und System des Römischen Privatrechts. 1930
..... 369/ 19/

Surville, F.— Cours élémentaires de droit international privé. Supplément sur la nationalité française, par F. J. de La Morandiere, & H. Batiffol. 1929 385-1/ 21/

ECONOMICS.

Carlile, W. W.— The Evolution of Modern Money. 1901 432/110/

Dewing, A. S.— The Financial Policy of Corporations. 1926 424/ 53/

Fischer, P. T. & Wagenführ, H.— Kartelle in Europa (ohne Deutschland). 1929
..... 427/ 21/

Gibbins, H. de B.— The Industrial History of England. 1926 417/148/

Gruntzel, J.— Geldwert und Wechselkurs. 1923 432/111/

Herle, J. & Metzner, M.— Neue Beiträge zum Kartellproblem. 1929 427/ 22/

Hone, J. N.— The Manor and Manorial Records. 1925 417/147/

Kestner, F.— Der Organisationszwang: Eine Untersuchung über die Kämpfe zwischen

千里山圖書館新着圖書一覽

購 入 圖 書

SERIES.

- Capps, F. & others.— The Loeb Classical Library, (Greek Authors).
- Aeschylus, with an Eng. Tr. by H. W. Smyth,
- Vol. 1. The Suppliant Maidens; The Persians; Prometheus Bound; The Seven Against Thebes. 1927. ... 003/ 2 / 4-1
- Vol. 2. Agamemnon; The Libation-Bearers; Eumenides: Fragments. 1930
..... 003/ 2 / 4-2
- Aristophanes, with an Eng. Tr. by B. B. Rogers,
- Vol. 1. The Acharnians; The Knights; The Clouds; The Wasps. 1924. 003/ 2 / 9-1
- Vol. 2. The Peace; The Birds; The Frogs. 1927. 003/ 2 / 9-2
- Vol. 3. The Lysistrata; The Thesmophoriazousae; The Ecclesiazusae; The Plutus. 003/ 2 / 9-3
- The Greek Anthology, with an Eng. Tr. by W. R. Paton,
- Vol. 1. Christian Epigrams; Christodorus of Thebes in Egypt; The Cyzicene Epigrams; The Poems of the Different Anthologies; The Amatory Epigrams; The Dedicatory Epigrams. 1927 003/ 2 / 36-1
- Vol. 2. Sepulchral Epigrams; The Epigrams of Saint Gregory the Theologian. 1925 003/ 2 / 36-2
- Vol. 3. The Declamatory Epigrams. 1925. 003/ 2 / 36-3
- Vol. 4. The Hortatory and Admonitory Epigrams; The Convivial and Satirical Epigrams; Strato's Musa Puerilis. 1926 003/ 2 / 36-4
- Vol. 5. Epigrams in Various Metres; Arithmetical Problems, Riddles, Oracles: Miscellanea; Epigrams of the Planudean Anthology not in the Palatine Manuscript. 1926. 003/ 2 / 36-5
- The Greek Bucolic Poets, with an Eng. Tr.

- by J. M. Edmonds. 1928 003/ 2 / 37
- Lyra Graeca being the Remains of All the Greek Lyric Poets from Eumelus to Timotheus excepting Pindar. Tr. by J. M. Edmonds,
- Vol. 1. Terpander, Alcman, Sappho and Alcaeus. 1928 003/ 2 / 49-1
- Vol. 2. Stesichorus, Ibycus, Anacreon and Simonides. 1924 003/ 2 / 49-2
- Vol. 3. Corinna, Bacchylides, Timotheus, The Anonymous Fragments, The Folk-Songs and the Scolia, with an Account of Greek Lyric Poetry. 1927 003/ 2 / 49-3
- The Odes of Pindar including the Principal Fragments, with an Eng. Tr. by J. Sandys. 1927 003/ 2 / 60
- Sophocles, with an Eng. Tr. by F. Storr,
- Vol. 1. Oedipus the King; Oedipus at Colonus; Antigone. 1928. 003/ 2 / 77-1
- Vol. 2. Ajax; Electra; Trachiniae; Philoctetes. 1929. 003/ 2 / 77-2
- (Latin Authors)
- St. Augustine's Confession, with an Eng. Tr. by W. Watts,
- Vol. 1. Books, 1. — 8. 1919 ... 003/ 2 / 3-1
- Vol. 2. Book. 9. to End. 1925. 003/ 2 / 3-2
- Rhys, E.— Everyman's Library.
- Eliot, G.— Adam Bede. (27) 003/ 1 / 27
- Hawthorne, N.— The House of the Seven Gables. (176) 003/ 1 / 176
- Percy's Reliques of Ancient English Poetry.
- Vol. 1. Series 1 & 2 (Bk. 1) (148)
..... 003/ 1 / 148
- Vol. 2. Series 2 (contd.) to End. (149)
..... 003/ 1 / 149
- ### PHILOSOPHY.
- Brentano, F.— Aristoteles und seine Weltanschauung. 1911. 122/ 6 /
- Dimnet, E.— The Art of Thinking. 1930.
..... 100/ 15/
- Heinemann, F.— Neue Wege der Philosophie, Geist/ Leben/ Existenz: Eine Einführung in die Philosophie der Gegenwart. 1929
..... 124/ 4 /

學報維持費について

本學學報は維持費として年額壹圓御拂込の方に限り御送りして居りますから、校友その他關係者各位に於いて購讀希望の方は左欄申込書と共に維持費を御拂込願ひます

昭和六年三月

關西大學學報局

御拂込は郵便爲替か振替かを希望いたしますが若し三ヶ年分以上御拂込下さるならば御手数のかゝらぬやう集金郵便にいたします。

學報申込書

一金圓也 但學報維持費 ヶ年分(自昭和 年 月 至昭和 年 月)

右金額相添へ申込候也

No.

昭和 年 月 日

氏名

關西大學學報局御中

明治 昭和 年 學部 專門部 科卒業

一、勤務先

一、現住所

拂込方法 振替貯金又は郵便爲替 (但し集金郵便は金參圓以上に限ります)

編輯餘錄

▼晴風霞を籠めて、彌生の空はいとも長閑に、野邊に萌え出でし若草も一しほ色まさるのとき、今や幾百の若人は業を卒へて、思ひ出多き學園を後に、晴れの門出に上らうとしてゐます。これらの諸君に對し、切に將來の清健ご多幸を祈るご共に、相變らぬ御聲援を望みます。

▼本號には、正井教授、武田教授、西村講師の論文の外に、校友山本勝市氏よりも貴重な論文をいただきました。山本氏は日常殊に多忙なるに拘らず、弊

校友各位に

學報維持費の制度を定めましてから本月を以て滿一ヶ年となりましたので本號で維持費切れとなる方々が多數あります。その方々は御手数ながら今月末までに上欄申込書により爾後の分を御拂込下さいますやう豫め御通知申し上げます。

局よりの委嘱に快く應じて投稿を願へた次第です。

▼本號は經濟學方面が有勢で、宛も經濟學特輯號の感がありますが、次號よりは追々法律、商業、文學の方面にもそれぞれ翼を伸してゆくつもりです。

▼清家講師の「外交史上より觀たる歐洲聯邦について」は後一回で完結となるのですが、都合で次號になりましたことをお斷りして置きます。

大正十一年六月十五日創刊
昭和六年三月十五日印刷
昭和六年三月十五日發行

不許複製
編輯兼遠藤銀
發行人 谷口默次
印刷所 谷口印刷所
發行所 關西大學學報局

天六學舎 關西大學
電話 堀川 一〇三九
堀河 二六〇九
振替口座 二六七五番

千里山學舎 關西大學
大阪 市外 千里山
電話 吹田 一二三

菊判上製三八〇頁
定價貳圓八拾錢
送料廿七錢

— [48] —

集

募

徒

生

大阪城東商業學校

大阪市外大軌小阪停留所前（上六より十分）

電話小阪一六五番・三十一番

特長

商業各科目の外に工業課目

（機械工業
電氣工業
化學工業）

を課す

募集人員

第一本科
第二本科

（夜間）一學年 百五十名
上編編入 二、三學年 若干名

入學
考查

三月十五日（日）

第一本科第一學年入學考查

三月二十九日（日）

（入學許可者發表三月二十一日）
第二本科（夜間）及上級編入試験

願書
受付

二月一日より考查前日迄本校及び大軌ビル三階

組織

財團法人

（敷地 五千坪
校舎 八百三十坪）

學則
申込次第
進呈

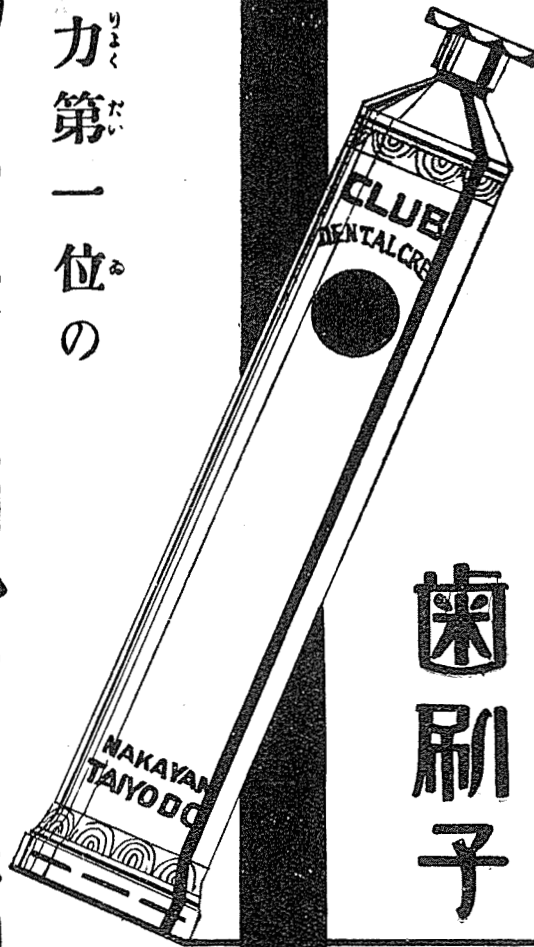
顧問

京都帝國大學法學部長 法學博士 烏賀陽然良

國產の愛用
國富の増進

效力第一位の

クラブ煉歯磨



衛生第一の國產
セルロイド製柄

クラブ
歯刷牙子

生徒募集

第一本科(晝)

出願期限 昭和六年三月一日ヨリ三月二十五日迄

一年級一五〇名 二年級五〇名 (高一修了編入組) 三年、四年 若干名

甲種 認定

此花商業學校

第二本科(夜)

出願期限 昭和六年三月一日ヨリ三月三十日迄

一年級一〇〇名 二年級五〇名 三年級若干名

晝夜共文部大臣甲種認定

大 阪 長 柄
電 話 堀 川 一 九 五 一

集

募

徒

生

募集人員

第一學年 約二百五十名
第二、三學年 補缺若干名

關西甲種商業學校

○願書受付

三月一日より三月三十日まで

○入學考查

三月三十一日

特

長

甲種認可 修業年限三年 夜間教授

關西大學第二商業學校

○募集人員

第一學年 二百名

○願書受付

二月十日より三月二十八日まで

○入學考查

三月二十九日

(量的生産よりも質的向上を目標とす)

北陽商業學校

- (晝) **第一部** 〔文部省認定修業年限五ヶ年制〕
尋常小學校卒業入學資格ナリ **第一學年八十名** (二學級ニ編成ス) 募集ス
- (夜) **第二部** 〔文部省認定特設夜間授業ノ甲種商業修業年限本科四年制高小卒又ハ同程度ヨリ入學〕 **第一學年八十名** (二學級ニ編成ス) 募集ス

第一部、第二部共上級各學年補欠若干名ニ限り檢定試験ノ上入學ヲ許可ス
學則ハ郵便又ハ直接學校ヘ (電話北七五七五番)

所在地 大阪市東淀川區淡路町 (天六ヨリ約五分淡路交又点下車
新京阪電車淡路下車東一丁中)



北陽商業學校校舎全景

(量的生産よりも質的向上を目標とす)

本校の特色

一、中學校卒業と本校卒業生の特典

本校は文部大臣の認可を得て設立したる夜間部五ヶ年制(入學資格尋常小學校卒業)夜間部本科四ヶ年制(又ハ同程度)の甲種商業學校なれば本校卒業生は一般上級學校入學に關し夜間部畢業問部は中學校卒業生と同等の資格特典を文部省より指定せられ文官任用令により判任官たる資格及在學中徴集猶豫(改正後法)ヲ受ケナクテモイ一幹部候補生たる資格及在學年限短縮其他官公立同種學校の有する一切の特典を有す(本校には陸軍省より現役配屬將校が配屬されて居る)

二、人格の感化は本校教育の第一義

人格の感化は凡人の容易に口にし得べからざるなりと雖も訓育の第一義は畢竟茲にあり故に先づ教師の人格を嚴格にし成るべく言談の教を少くし學校を生徒中に道徳的空氣を瀰漫せしめあらゆる施設中に徳性訓練の機會を偶せしめ以て方今漸く華美情弊に流れんる都市子弟を指導せん事に努む

三、本校商業學科と實力養成

甲種商業學校卒業生は一般上級學校入學に關し中學校卒業生と同等以上の資格取扱いをうけ上級學校に進み得るも商業學校の使命は實業社會に役立つ實務員の養成にあり故に本校に於いては廣く實業家の實業上の意見を徴し以て商業學科及び珠算科に力をいたしあらゆる機會をたらへて之が實力養成に資せん

四、人としての教育

學校教育の側面は人としての教育即ち人間としての教育であるべきなり然るに現時中等教育に於いては餘りに主智的職業的に偏し人から人へ心へ心への精神教育について比較的省みられず本校が音楽科を學科中毎週一時間を加へたるも蓋し意にあり

五、照明學上より備へたる本校教室

從來高唱されつゝある學校衛生設備は多く晝間通學生のみを考慮し夜間通學生の爲めに省みらるるもの殆ど無し本校は此點に意を用ひて各教室に冬季はストーブを設置し夜間教室電燈其他の設備の完備に努む

六、教育的環境と生徒の健康

本校新校舎は東淀川區柴島水源地に隣接し流れつきせぬ淀川を前方に東に生駒山西に六甲摩耶山を一眸に望み長閑に圍む春の日は附近一帯菜花に埋れ空氣清澄教育上學校衛生上最適地なり

七、委託生制度

本校(第二部即ち夜間部)に銀行會社商店の委託生制度を設け之等入學者は入學に關し特別の取扱をなす但シ委託生ハ第一學年第二學年ニ限リ委託生特別取扱は諸銀行會社商店勤務のものにして自己の勤務先の直接監督者の推薦あるものは檢衡の上無試験入學を許す

八、關西大學校友推薦無試験入學

小學校最終成績平均八点以上のものに限り檢衡の上無試験入學を許可す

關西大學學學生募集

學部 專門部

法文學部

法律學科 (英吉利法、獨逸法、佛蘭西法)
政治學科
文學科 (哲、英、文學)

各科第一學年 若干名

經濟學部

經濟學科
商業學科

出願期間 三月一日ヨリ四月八日迄
試驗期日 四月九日

試驗場所 千里山學舎

大學豫科 第一學年 三百五十名

出願期間 二月十五日ヨリ四月五日迄
試驗期日 四月六日及七日

試驗場所 千里山學舎

第一部 (晝間部) 法律學科、經濟學科、商業學科……本科第一學年約四百名

第二部 (夜間部) 法律學科、經濟學科、商業學科……本科第一學年約七百名

出願期間 第一部 二月二十日ヨリ四月七日迄
第二部 二月二十日ヨリ三月三十一日迄

試驗期日 第一部 四月八日
第二部 四月二日

試驗場所 天六學舎

詳細ハ郵券五錢ヲ添ヘ學部及豫科ハ千里山學舎庶務課ニ、專門部ハ天六學舎庶務課宛照會ノコト

關西大學

千里山學舎 (大學院) 大阪府外千里山 電話 吹田 一二三番
大學豫科 大阪市東淀川區 電話 堀川 一〇三九番

天六學舎 (專門部) 長柄中通二丁目 電話 堀川 一七八〇番